

## フランス語指示詞の諸問題

## - Autour des démonstratifs en français -

## 1. はじめに

指示詞 (démonstratifs) という名称は、人や物を指すはたらきを持つ指示形容詞 (adjectifs démonstratifs) と指示代名詞 (pronoms démonstratifs) をまとめて呼ぶときに用いられる。私たちは言葉を話すとき、何かについて話すことが多く、その際に話題になっている人・物を指して「これ」と聞き手に示す必要に迫られることがある。「指す」ことは言葉の根源的なはたらきに結びついており、世界中の言語は何らかの指示詞を持つと考えられる。指示詞のはたらきを考察することによって、言語の本質に触れることができる。

(1) フランス語の指示詞には次のものがある。

## [A] 指示形容詞

形容詞が付く名詞の性と数によって右のように変化する。ただし、母音・無音の h で始まる男性単数名詞には *cet* を用いる : *cet homme*

|    | 単数           | 複数         |
|----|--------------|------------|
| 男性 | <i>ce</i>    | <i>ces</i> |
| 女性 | <i>cette</i> |            |

## [B] 指示代名詞

指示代名詞には、性数の変化のないものとあるものがある。

(i) 性数の変化のないもの

*ceci, cela, ça, ce*

(ii) 性数の変化のあるもの

単独で用いることはなく、常に前置詞句や関係節などの補足語を伴って用いる。

|    | 単数           | 複数            |
|----|--------------|---------------|
| 男性 | <i>celui</i> | <i>ceux</i>   |
| 女性 | <i>celle</i> | <i>celles</i> |

## 2. 伝統文法による指示詞の記述

目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2005 による。以下に [ ] で示しているのは原文にはなく、言語学で一般に用いられている呼び方である。

まず指示形容詞から見る。

(1) 目の前にあるものを「この、その、あの」と指し示す。[現場指示用法、直示 *deixis*]

Lisez *cette* lettre. この手紙を読んでください。

**N.B.** フランス語の指示形容詞の特徴は、英語の *this book / that book*、日本語の「この本」(近称)「その本」(中称)「あの本」(遠称) のように、話し手からの距離を表す区別がないという点にある。これを補うために名詞の後に *-ci* (近称) / *-là* (遠称) を付けることがある。

D'où vient *ce fromage-là* ? — *Ce fromage-ci*, Madame ?

「そのチーズの産地はどこですか」「こちらのチーズですか、奥さん？」

(2) 既述・既知の事柄、これから述べる事柄を指し示す。[文脈指示用法]

Je lui ai dit de se taire ; il n'a pas suivi *ce* conseil. [前方照応]

黙っているように言ったが、彼はこの忠告に従わなかった。

Ecoutez *ce* récit avant que je réponde. [後方照応]

私が答える前に次の話を聞いてください。

**N.B.** 指示形容詞の文脈指示用法は次の3種類に分類される。

(i) 忠実照応 (anaphore fidèle) : 先行詞と同じ単語で受ける。

Une femme entra dans la pièce. J'avais vu *cette* femme chez un ami.

女性が一人部屋に入って来た。私はその女性を友人の家で見かけたことがあった。

(ii) 非忠実照応 (anaphore infidèle) : 先行詞と異なる単語で受ける。

Un arbre dressait ses branches tordues non loin de là. Il décida de passer la nuit près de *ce* compagnon. そこから程遠からぬ所に1本の木がねじれた枝を伸ばしていた。

彼はこの友の傍らで夜を明かすことにした。

(iii) 要約照応 (anaphore résumptive)

Je lui ai raconté ce qui s'était passé la veille. *Cette* histoire l'a amusé.

私は彼に前の日に起きたことを話した。この話は彼を面白がらせた。

注) anaphore résumptive という呼び名は Maillard, M. « Essai de typologie des substituts diaphoriques », *Langue française* 21, 1974.による。近年は deixis du discours 「談話の直示」と呼ばれることもある。

(3) 現在いる場所、現在または現在に近い時を指し示す。

Il n'est plus dans *cette* ville. 彼はもうこの町にはいない。

Le vin est bon *cette* année. 今年のワインはできがいい。

**N.B.** 日本語では話し手のいる場所・時間を指すこの用法があり、これを「絶対指示」と呼ぶことがある。

ここ、こちら、この町、この国、これまで、これから、この夏

(堀口和吉「指示詞の表現性」『日本語・日本文化』8、大阪外国語大学、1978)

フランス語の指示詞には近称・遠称の区別がないのでわからないが、話し手のいる場所・時間を指すときには常に近称が用いられる。フランス語ではこれを接辞 *-ci* によって表すことがある。

Je suis très occupé *ces* jours-ci. 私は最近とても忙しい。

現在から隔たった時には *-là* を用いる。

Il a fait très froid *cette* année-là. その年はとても寒かった。

(4) 名詞の後に関係詞節または不定詞を伴って強調を表す。

Quel est donc *ce* secret que tu veux m'apprendre ?

君が私に教えたがっている秘密とは何ですか。

*Ce* bonheur désolant de marier sa fille !

わが娘を嫁がせるあの悲しい幸福よ。

**N.B.** この用法は後で述べる記憶指示用法とも考えることができる。

(5) 軽蔑、皮肉を表す。

*Ce* monsieur X est trop bavard. あのX氏はおしゃべりがすぎる。

Ah ! Encore *cet* homme. ああ、またあの男か。

(6) 感嘆文で *quel* を意味し、驚き・称赞・憤り・皮肉などを表す。

*Ce* grand homme ! なんと立派な人だろう。

Il veut que je vienne, *cette* idée ! 私に来てほしいって、なんとばかげた考えだ。

(7) レストランのボーイなどが複数の客に対して用いる敬語的用法。

Que prendront *ces* dames ? お客様方は何になさいますか。

(8) 〈un(e) de ces + 複数名詞〉は、話し言葉で「ひどい、ものすごい」を意味する。

J'ai une de ces faims. ひどく腹が減った。

Il m'a lancé un de ces regards. 彼はものすごく怖い目で私を見た。

《補足》

『現代フランス広文典』には指示形容詞の重要な用法がひとつ抜けている。朝倉文法事典から引く。

(9) C'était une de ces jolies et charmantes filles, nées comme par une erreur du destin dans une famille d'employés. それは運命の手違いのように月給取りの家庭に生まれた、美しい魅力のある娘の一人でした。

**N.B.** 指示形容詞のこの用法を日本のフランス語学の世界では「周知の指示形容詞」と呼ぶことがある。

続いて同じく『現代フランス広文典』から指示代名詞の用法を見る。

(I) ce の用法

a. être の主語

C'est facile. それは容易だ。

Ce sont mes camarades. それは私の同僚だ。

文頭に遊離した主語を再示・予示するのにしばしば用いられる。

Un hôtel pas cher, c'est difficile à trouver. [左方転位]

高くないホテルは見つけるのがむずかしい。

C'est à qui, ce stylo? [右方転位] (東郷の作例)

誰の、この万年筆?

**N.B.** 右方転位では転位された名詞句の前に休止があるのがふつうである。これにたいして C'est nous les gagnants. 「勝者はわれわれだ。」のように休止のない場合は異なる構文とみなすべきという意見もある。この構文については Berrendonner, A. & M.-J. Béguelin « Le verbe c'est », *Langue française* 205, 2020 を参照のこと。

b. 関係代名詞の先行詞

Ce que tu dis est faux. 君が言っていることは間違いだ。

c. 間接疑問を導く

Je me demande ce qui se passe. 何が起こったのだろう。

d. 感嘆節を導く

Ce qu'on s'est amusé! 何と楽しかったことだろう。

(II) ceci, cela の用法

a. ceci は話者に近いものを、cela は遠いものを指す。[現場指示用法]

J'aime mieux ceci que cela. 私はそれよりもこれがいい。

b. ceci はこれから述べることを、cela は直前に述べたことを指す。

[文脈指示、テキスト指示]

Notez bien ceci : le témoin n'a pas vu lui-même l'accusé.

次のことによくご留意ください。証人自身は被疑者を見ていないということに。

Je ne cèderai pas? Je n'ai pas dit cela.

私が譲歩しないだろうですって。そうは言っていません。

c. *ce* を用いることができないとき、すなわち *ce* が *être* 以外の動詞の主語となるとき *ce* のかわりに用いる。

*Cela ne vous regarde pas.* これはあなたに関係ないことだ。

*C'est (bien) cela.* そうです。

### (III) *ça* の用法

*cela* の収縮形であり、話し言葉で *cela* の代わりに用いられる。

a. 眼前の事物、現在の状況、話題となっている事柄を指す。

*Donnez-moi ça.* それを下さい。

*Ça depend.* それは場合によりけりだ。

*Qu'est-ce que ça veut dire ?* それはどういう意味ですか。

**N.B.** 目黒の説明は現場指示用法と文脈指示用法をいっしょにしている。一番目の例は指差しを伴い現場指示である。二番目と三番目は相手が言ったことを指す文脈指示である。

b. 漠然と事物の対象を指す。

*Comment ça va ?* 調子はどうですか。

*Ça fume, par là.* あちらで煙が上がっている。

*Ça sent mauvais ici.* ここはいやに臭いがする。

c. 非人称主語 *il* に代わる。

*Ça pleut.* 雨が降っている。

*Ça arrive qu'il se trompe.* 彼も間違ふことがある。

注) 否定形の *Ça ne pleut pas.* は使わない。 *Il* を用いる。

**N.B.** このような *ça* の用法を扱った研究に春木仁孝「*ÇA* を主語とする発話と認知モード」『フランス語学研究』48, 2014.がある。

d. 疑問代名詞、疑問副詞などと用いて強調を表す。

*Qui ça ?* それはだれなの。

*Ça oui.* そうだよ。

e. 人を指して軽蔑または親愛の情を表すことがある。

*Encore cet ivrogne ? Fichez-moi ça dehors !*

またあの飲んだくれが来たのか。やつを外へ追い出してくれ。

f. *c'est* の強調形 *cela est* が否定形に置かれたり、*être* の前に *devoir, pouvoir* があるときには、しばしば *ça* が用いられる。

*Ça n'est pas vrai.* それは本当ではない。

*Ça pourrait mal finir.* それは悪い結果になるかもしれない。

### 《補足》

『現代フランス広文典』の記述には、指示代名詞 *ça* の次の用法が抜けている。

i) 文頭に転位された名詞句・不定詞句を受ける。

*Arriver là avant minuit, ça me paraît difficile.*

真夜中までにそこに着くのは難しいように思える。

転位された名詞句が総称のときに限り人を指すことができる。

*Les enfants, ça salit tout.*

子供は何でも汚してしまう。

ii) 総称の直接目的補語の代理をする。

*Aimez-vous le chocolat ? — Oui, j'aime ça.*

「チョコレートはお好きですか」「ええ、好きです」

このとき *le / la / les* で受けることができない : \**Oui, je l'aime.*

目的語を略して *J'aime bien.* と答えることもできる。

### 【考察と補足】

(A) 指示代名詞の *ce* と *cela / ça* については、両者がほぼ相補分布の関係にあることを指摘しておく必要がある。*ce* はアクセントが置かれることがない弱形で接辞 (*clitique*) であり、現在では *être* の主語としてのみ用いられる。*cela / ça* は強形 (アクセントを置くことができる) であり、それ以外の統語的位置で用いる。

a. *C'est évident.* それは明らかだ。

b. *Il faut penser à {cela / \*ce}.* そのことを考えなくてはならない。

ただし、特に否定で *cela* を *ce* の代わりに主語に用いることがある。

c. *{Cela / Ce} n'est pas facile.* それはかんたんではない。

また *ce* は *a-*で始まる動詞の前では *ç'*となる。

d. *Ç'a été facile.* それはかんたんだった。

(B) 歴史的に *ceci* は *ce+ci*、*cela* は *ce+là* のように作られた複合形である。このため文章語で *cela est* はしばしば強調のため *c'est là* と分解することがある。

*C'est là notre problème majeur.* それが私たちの大きな問題だ。

(C) 古いフランス語では *ce* は弱形ではなく強形の代名詞であった。この名残は次のような慣用句に残っている。

*ce disant* そう言いながら、*ce faisant* そうしながら、*pour ce faire* そうするために

*sur ce* そこで、*pour ce* そのために、*ce me semble* 私にはそう思える

*On l'a attaqué et ce en plein jour.* 彼は襲われた。しかも白昼に。

### 3. 「指す」ことと「受ける」こと

(1) 何かを指すはたらきを持つ語は指示詞に限らない。他にも次のような語は何かを指すために用いられる。これらの語と指示詞が何かを指すやり方は同じなのだろうか。それともちがうのだろうか。

a. 固有名 : *Pierre, la France, etc.*

b. 人称代名詞

主格 : *je, tu, nous, vous etc.*

直接目的格 : *me, te, le, la, etc.*

間接目的格 : *me, te, lui, etc.*

強勢形 : *moi, toi, etc.*

c. 定冠詞付き名詞句 (*descriptions définies*)

*le roi de France, le concierge de notre immeuble, etc.*

d. 所有形容詞付き名詞句

*ma fille, leur maison, etc.*

e. 所有代名詞 : *le mien, la tienne, etc.*

(2) 何かを指す語句をまとめて指示表現 (*expressions référentielles*) と呼ぶ。指示表現がうまく働くためには、次の条件を満たさなくてはならない。

**指示表現の満たすべき条件 (強い条件)**

話し手が談話において指示表現 R を用いるとき、R によって指されているものが聞き手に正しく伝わらなくてはならない。言い換えれば R が指すものが聞き手によって唯一的に同定されなくてはならない。

**N.B.** 聞き手による唯一的同定は指示表現が満たすべき強い条件である。唯一的同定ができなくても指示表現を使える場合がある。

a. *Il faut aller à la banque pour retirer de l'argent.*

お金を下ろすために銀行に行かなくては。

c. *Il s'est cassé la jambe.*

彼は脚を骨折した。

b. *Cette cravate est le cadeau de ma fille.*

このネクタイは娘からのプレゼントだ。

指示表現はそれだけでは何かを正しく指す力をもたない (指示表現の語用論的不完全性)。指示表現は何かに助けられて初めて対象を指すことができる。指示表現を助ける次のようなものである。

(A) 話し手と聞き手が共有する知識

*Où est Pierre ?* 「ピエールはどこだ？」という発話は、話し手も聞き手もピエールが誰か知っており、また話し手と聞き手が知っているピエールが一人しかいないときにしか使えない。固有名が指示対象を指すのは共有知識に支えられているからである。

(B) 発話という行為

1 人称・2 人称の人称代名詞の指示を支えるのは発話という行為そのものである。je は発話している人を指し、tu / vous は発話が向けられた人を指す。

3 人称の il(s) / elle(s) はそうではないことに注意が必要である。3 人称は「発話に参加していない人・物」を指す。したがって 3 人称の人称代名詞の指示を支えているのは発話という行為ではない。il(s) / elle(s) は「指す」ことばではなく、「受ける」ことばである。3 人称の人称代名詞は常に先行詞を持ち、文脈指示でしか用いられない。

(C) 発話行為に参加している人が指示の起点となる

*mon père* は発話者の父親を指し、*votre fille* は発話の相手の娘を指す。所有形容詞の付いた名詞句は、発話に参加している人との関係を利用して何かを指す。所有代名詞 *le mien, la vôtre* も同じである。ただし所有代名詞には先行詞があるので、「指す」ことばであると同時に「受ける」ことばでもある。3 人称の *son père* や *le sien* の場合、指示の起点となるのは発話行為の参加者ではなく、話題に出た事物である。

(D) 指示領域での唯一性

指示を支える仕組みの中でいちばん複雑なのは定冠詞の付いた名詞句の場合である。le N が指すのは、何らかのやり方で設定された指示のわく組み (*cadre de référence*) の中にある唯一の N である。

指示領域が最大するとき、le Nはこの世界にただひとつあるものを指す。

a. *le soleil, la terre, la lune, etc.*

指示領域が話し手・聞き手のいる発話の場するとき、le Nはその場にある（あるはずの）ものを指す。定冠詞の現場指示的用法と呼ばれることがある。この用法では疑問文や命令文が多くなる。

b. [入って来た人に] *Ferme la porte.* ドアを閉めて。

c. [アパートの住人に] *Où est le concierge ?* 管理人さんはどこですか。

d. *Allumez la lumière.* 灯りを点けて。

多くの場合、指示領域は先行文脈によって言語的に作り出される。

e. *Hier, je suis allé au lycée de mon fils, mais le proviseur était absent.*

昨日、私は息子の高校に行ったのだが、校長先生は不在だった。

f. *Elle se pencha pour ramasser l'hebdomadaire posé en équilibre sur la bouteille de lait, referma la porte et se dirigea vers la cuisine en traînant ses savates.*

(Catherine Arley, *La femme de paille*)

ヒルデガルドは牛乳瓶の上にバランスを取って載せられていた週刊誌を取るためにかがむとドアを閉め、古ぼけたスリッパを引きずりながら台所に向かった。

(3) 指示代名詞 *cela, ceci, ça* が事物を指すやり方は、以上解説した指示表現と根本的に異なる。指示代名詞の基本的用法は目の前にあるものを指す直示 (*deixis*) である。指示代名詞の指示には、共有知識も発話行為も指示領域も何ひとつ関わっていない。指示代名詞には話し手による「指差し」が必要であり、話し手が指差すことで何を指しているのかが聞き手にわかる。店の前に立って *Donnez-moi ça.* 「これ下さい」と言っても *ça* が何を指しているのか相手に伝わらない。商品を指差して *ça* と言わなくてはならない。この意味において指示代名詞は典型的な指示表現であると言える。*cela, ceci* の場合はこれに加えて話し手からの遠近の区別という意味素性があるが、フランス語はこの区別をどんどんなくしているため、*ceci* の使用頻度は極めて低い。日常会話ではほぼ *ça* のみ用いる。

(4) 性数の区別のある指示代名詞 *celui / celle* は「指す」ことばではなく「受ける」ことばである。*celui / celle* には性数の区別があるが、それはこの系列の指示代名詞がもっぱら「受ける」ことばだからである。*celui / celle* には常に先行詞があり、先行詞の性数に一致するのがその証拠である。

a. *Ce n'est pas mon vélo, c'est celui de Paul.*

これは私の自転車じゃない。ポールのだ。

b. *Ce n'est pas ma voiture, c'est celle de Jean.*

これは私の車じゃない。ジャンのだ。

したがって、*celui / celle* の系列は指示代名詞と呼ばれてはいるが、ほんとうに何かを「指す」ことばではなく、前に出て来た単語の代理をするだけの「受ける」ことば（照応詞 *anaphora*）である。

(5) *celui / celle* 系列の指示代名詞は人も物も指すことができる。

a. *C'était peut-être de tous ses livres celui auquel il tenait le plus.*

それはおそらく彼のすべての著書のうちで彼がいちばん愛着していたものだった。

b. *Ma femme et celle de mon cousin sont parties ensemble.*

私の妻と従兄弟の奥さんがいっしょに出掛けて行った。

その理由は *celui / celle* が「受ける」ことばだからである。先行詞が人であれば人を、物であれば物を指す。だから人も物も指すことができるのである。

一方、*ceci, cela, ça* 系列の指示代名詞は物を指し、人を指すのは俗語的用法で軽蔑的だとされている。

a. *Il est maigrichon et pâlot. Ça ne fera pas un fameux soldat.*

こいつはやせっぽちで青白い。こいつは立派な兵士にはなれまい。

それはふつう人を指すためには *il / elle* などの人称代名詞を用いるからである。日本語でも人を指示詞で指すとぞんざいな表現になる。

b. [自分の妻について] *あれはおしゃべりが過ぎる。*

(6) *celui / celle* 系列の指示代名詞と異なり、*ceci, cela, ça* の系列には性数の区別がない。ふつう中性と言われている。

**N.B.** 最近、Kleiber は *ceci, cela, ça, ce* は中性ではなく、男性単数とみなすべきだと主張している。cf. Kleiber, G. (2018) « Sur le nombre et le genre de *ça* », J. Jadir (ed) *Linguistique et discours : description, typologie et théorisation*, Peter Lang.

なぜ *ceci, cela, ça* の系列には性数の区別がないのだろうか。それは代名詞の中でこの系列だけがほんとうに「指す」ことばで、「受ける」ことばではないからである。

「受ける」ことばには先行詞があり、先行詞の性数に一致する。

a. *Un homme se promenait dans le parc. Il portait une veste verte.*

男が公園を散歩していた。彼は緑色の上着を着ていた。

b. *Il y a une valise. Je vais la monter dans le grenier.*

トランクがある。私はそれを屋根裏に持って上がる。

*ceci, cela, ça* の系列は、原則として人を指すことはなく物を指す。物には性の区別がない。だからこの系列の指示代名詞には男性形・女性形の区別がないのである。

フランス語では物を指す名詞にも性の区別があり、*livre* は男性名詞、*fleur* は女性名詞ではないかと反論されるかも知れない。しかしこれは誤りである。本に性別があるのではなく、*livre* という単語に性別があるのである。*livre* が男性名詞で *fleur* が女性名詞だというのは、モノの世界（現実）ではなくコトバの世界で成り立つことである。指示代名詞 *ceci, cela, ça* は、コトバの世界を通さずにモノの世界にある事物を指すただひとつの代名詞である。

(7) 代名詞の「言語的コントロール」と「語用論的コントロール」

このあたりの事情をよく考察しているのが Tasmowski-de Ryck, L. & S.P.Verluyten “Linguistic control of pronouns”, *Journal of Semantics* 4 (1982)である。

代名詞が先行詞なしに用いられている次のような例では、代名詞は「語用論的コントロール」(pragmatic control) を受けているとされることがある。語用論的コントロールとは、目の前にいる人・物を直接指すということである。

a. [犬を撫でようと近づく人に]

*Attention. Il risque de te mordre.*

気をつけて。噛むかも知れないよ。



b. [皿を指差して]

*Elle est sale.* 汚れてる。

c. [猛スピードで走る車を見て]

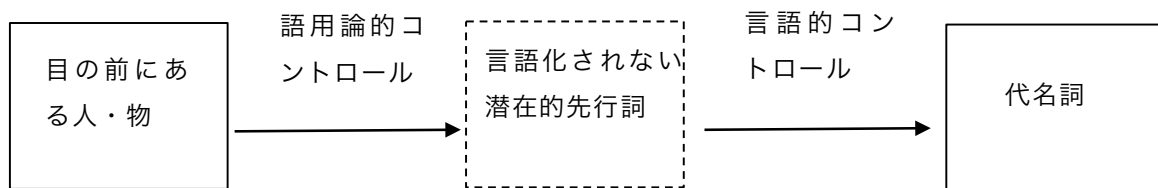
*Ils roulent comme des fous.*

あいつらは狂ったように車を走らせるんだから。

d. [プールから戻って来る人に]

*Elle est froide ?* 冷たいですか。

しかし、Tasmowski & Verluyten はこれは誤りだとする。T & V は「真の代名詞はすべて先行詞を持つ」という。彼らの考える図式は次のようなものである。



これを証明しているのが次のような例である。

e. [テーブルを車に積み込もうとしている人に]

Tu n'arriveras pas à *{la / \*le}* mettre dans la voiture.

それは車に入らないよ。

f. [眼鏡を取ってくれるように頼んで]

Tu peux me *les* passer, s'il te plaît ?

それを取ってくれるかい。

e. の *la* は潜在的先行詞 [*la table*] と一致し、f. の *les* は [*les lunettes*] と一致している。これは先行詞がないように見える代名詞も、実は言語化されていない潜在的先行詞の言語的コントロールを受けていることを示している。

ただし、このような先行詞なしの代名詞が使えるためには、指示対象が発話の場において十分に卓立した (*salient*) 状態にあり、何を指しているのかが聞き手にわからなくてはならない。次はそうではない場合である。このような場合は指差しを伴い *ça* を用いる。

g. [空に UFO のような物体を見て]

i) \*Tu *le* vois ? あれが見えるかい。

ii) Tu vois *ça* ?

(8) *ça* は指示代名詞でありながら特定の事物を指しにくい。

直示に用いられる *ça* は、実は名前のわかっている特定の事物を指しにくい。このような場合は *il / elle* 系列の人称代名詞を使う。

a. Regarde ! \*La chemise, *ça* n'a pas de manches !

見て。ワイシャツに袖がない。

b. Regarde ! La chemise, *elle* n'a pas de manches !

T&V は次のようにはっきり述べている。

“In fact, *ça* cannot be used for an NP referring to an actual object ; in that case, a pronoun

of the paradigm *il-elle-ils-elles* must be used.” (Tasmowski & Verluyten, *op. cit.*, p. 334)

実は *ça* は特定の事物を指す名詞句としては使えない。その場合、*il-elle-ils-elles* 系列の代名詞を用いるのである。

Kleiber も自分の車を指して *?Ça roule bien*. 「これはよく走る」とは言いにくいと述べている。この意味で *ça* は日本語のコレ、ソレ、アレとは性質が異なると考えるべきである。日本語では名前のわかっている事物にもコレ、ソレ、アレを使うことができるからである。

c. この腕時計？ これはウィーンを旅行したときに買ったんだ。

(9) なぜ *ça* は特定の事物を指しにくいのだろうか。T&V はその事実を指摘するに留まり、理由を説明していない。その理由はフランス語では代名詞の使用に関して次のような原則があるためだと考えられる。

#### フランス語の代名詞使用の原則

代名詞の使用にあたっては言語的コントロールを優先せよ。現場指示と文脈指示のどちらも可能な場合は文脈指示を優先せよ。

a. *Regarde ! Une brique est tombée sur le trottoir.*

見ろ。レンガが歩道に落ちて来た。

i) *Elle a failli blesser un passant.*

[そのレンガは] 通行人に怪我させるところだったぞ。

ii) *Ça a failli blesser un passant.*

上の例では i) の *elle* は先行文脈の *une brique* を受ける文脈指示で、ii) の *ça* は目の前に落ちて来たレンガを指す現場指示である。いずれの指示も可能ではあるが、ふつう用いられるのは i) の *elle* である。

**N.B.** *ça* には特定の事物を指すよりも、その事物を含む周囲の状況・出来事を指す「拡大指示」用法があるため、上の ii) では *ça* はレンガではなく「レンガが落ちて来たという出来事」を指すと解釈されることが多いと考えられる。

これにたいして日本語では逆に語用論的コントロール（現場指示）が優先される。

b. A: その腕時計はどこで買ったのですか。

B: {これ / \*それ} はロンドンで買いました。

このような場合、文脈指示で使われるソレではなく、現場指示のコレを用いる。日本語では言語的コントロール（文脈指示）が活発ではない。フランス語や英語ではコトバで作られた世界 (*univers de discours*) が話し手・聞き手のいる現実の世界と独立して存在するが、日本語ではこの独立性が弱いことのひとつの現れである。日本語はどうしても話し手・聞き手と発話の場を離れることかできない。

このため次のような練習問題では誤答が目立つ。カッコの中に適切な指示代名詞を入れる問題である。

c. *Je vous montre deux tableaux. Vous préférez ( ) ou ( ) ?*

日本語の「あなたはこれとそれのどちらが好きですか」に引きずられて *ça ou ça* と答える人が多い。しかし実際には *celui-ci ou celui-là* が正解である。

(10) フランス語で語用論的コントロールが用いられるのは、言語的コントロールが不可能な次のような場合である。

i) 事物の名前がわからない。

[市場で] *Donnez-moi ça et ça* . これとこれ下さい。

*Qu'est-ce que c'est que ça ?* これはいったい何ですか。

ii) 単一の名詞で呼ぶことができない

*Une jupe orange avec une veste verte, ça me fait horreur.*

オレンジ色のスカートに緑色のジャケットなんておぞましい。

iii) 多くの事物をまとめて呼ぶとき

*Tout ça, c'est des livres que vous avez écrits ?*

これ全部あなたが書いた本ですか。

iv) 指しているものがはっきりしない、または漠然と状況を指す

*Ça va ?* 元気かい。

*Ça va barder.* 雲行きが怪しくなってきた。

なぞなぞでは次のように *ça, ce* 系列の代名詞を使う。 *il / elle* 系列の代名詞を用いると、なぞなぞの答を類推できるからである。

a. *C'est petit, c'est rond, c'est vert, ça monte et ça descend ; qu'est-ce que c'est ?*

それは小さくて、丸くて緑色をしている。それは上がったり下がったりする。さてそれは何でしょう。

#### 4. 指示詞をめぐるよく論じられる問題

指示詞をめぐる問題のなかで今まで盛んに議論されてきたのは次のものである。

(A) *il est / c'est* の使い分け

〈A est B〉のコピュラ文の主語として人称代名詞 *il / elle* と指示代名詞 *ce* はどちらも用いられる。

a. *Mon frère ? Il est pâtissier.* 兄ですか。パティシエをしています。

b. *La fille qui danse ? C'est ma cousine.* 踊っている女の子ですか。私の従姉妹です。  
しかしいつでもどちらも使えるわけではない。

c. *Tu vois cette fleur ? {C' / \*Elle } est une espèce de rose.*

あの花が見えるかい。あれはバラの一種だよ。

d. *Comment est le nouveau prof ? — Eh bien, {il / \*c'} est sympa.*

「新しい先生はどんなだい」「そうだね、感じのいい人だよ」

この問題を Damouette & Pichon は « problème épineux de la langue française » 「フランス語の厄介な問題」と呼んだ。

(B) *le N* と *ce N* による照応

文脈指示で先行詞を受けるとき、定冠詞を用いた *le N* も指示形容詞を用いた *ce N* も用いられる。

a. *Le prince entra dans un jardin. {Le / Ce} jardin était calme et paisible.*

王子は庭に入って行った。{庭は / その庭は} 静かで落ち着いていた。

しかしその選択はいつでも任意ではない。

b. Une femme entra dans la pièce. J'avais vu {cette / \*la} femme chez un ami.

女性が一人部屋に入って来た。私はその女性を友人宅で見かけたことがあった。

c. Il y avait un garçon et une fille dans le square. {Le / \*Ce} garçon jouait avec un ballon.

公園に男の子と女の子が一人ずついた。男の子はボール遊びをしていた。

この問題は定冠詞による指示と指示形容詞による指示のちがいに關わるため、冠詞論にも大きな影響を与えた。

(C) Gary-Prieur, M.N.&M. Noailly (1996) « Démonstratifs insolites », *Poétique* 105. という論文で、次のような指示形容詞の用例が紹介された。

a. Bernis n'a plus que des pensées rudimentaires, les pensées qui dirigent l'action : sortir de **ce** cirque de montagnes où la tornade descendante le plonge, où la pluie en rafales est si drue qu'il fait nuit, sauter **ce** mur, gagner la mer.

ベルニスには行動を支配する本能的な思考しか残っていなかった。この迷路のような山を出るのだ。下降気流を吹き散らした竜巻が彼をそこに突き落としたのであり、そこでは暴風雨が激しいためまるで夜のようだ。この壁を飛び越えて海に出るのだ。

b. Il restait là, bras ballants, au centre de l'espace, observant fixement à ses pieds **cette** nappe de poussière grise qui masquait les dalles.

彼はその場所の真ん中に両腕をだらりと垂らしたまま佇んでいた。足下に広がり床のタイルを被っているこの灰色の埃の層を見つめながら。

De Mulder が “démonstratifs observationnels” 「視点を表す指示詞」と呼ぶこのような用法は、主として小説などの文学的テキストで用いられる。この用法では指示代名詞は登場人物が近くにあるものを見ているかのような視点効果があるとされる。先行詞なしに用いられることもあり、先行詞がある場合でも文脈指示（照応）なのか現場指示（直示）なのか意見が分かれている。ちなみに Kleiber はこの指示詞の視点効果そのものを認めていない。

(D) 新聞の見出しや本の標題で用いられる次のような指示形容詞の用法も議論を呼んだ。現場指示でも文脈指示でもないこのような用法は、指示詞にはこのふたつの用法に還元されない第三の用法があることを示唆している。フランス語学の世界ではこの第三の用法が話題になることは少なかった。

a. **Ces** Français qui consomment trop de médicaments.

薬を飲み過ぎるフランス人

b. **Ces** jeunes qui ont des difficultés.

生きずらさを抱える若者たち

(E) 周知の指示形容詞 (démonstratif de notoriété)

Elle songeait quelques fois que c'étaient là pourtant les plus beaux jours de sa vie, la lune de miel, comme on disait. Pour en goûter la douceur, il eût fallu, sans doute, s'en aller vers **ces** pays à noms sonores où les lendemains de mariage ont de plus suaves paresse.

(Flaubert, *Madame Bovary*)

彼女は時折考えた。けれどあれは人生の中でいちばん輝かしい日々だった。いわゆる蜜月というやつだ。その甘美さを味わうためにはおそらく、響きのよい名を持ち、結婚式に続く日々が甘やかな無為に溢れるという国に行かなくてはならなかっただろう。

## 5. *il est / c'est* の使い分け

### 5.1. コピュラ文の主語代名詞

(1) 〈A est B〉のようにふたつの名詞句または代名詞を *être* で結んだ文をコピュラ文 (*phrases copulatives*) という。コピュラ文の主語が代名詞のとき、人称代名詞 *il / elle* と指示代名詞 *ce* のどちらも用いられる。

a. *Que fait votre frère dans la vie ? — Il est professeur de maths.*

「お兄さんのお仕事は何ですか？」「数学の教師です」

b. *Si tu croises dans le couloir un monsieur qui porte des lunettes bizarres, eh bien, c'est le nouveau prof de maths.*

もし君が廊下で奇妙なメガネを掛けている男の人を見かけたら、それは新しい数学の先生だ。

人称代名詞 *il / elle* も指示代名詞 *ce* も動詞 *être* も初級文法の初めの方で学ぶ項目だが、初級文法の解説は十分とは言えない。

例えば京大文法 (『新初等フランス語教本《文法編》』白水社) の指示代名詞 *ce* の所には例文とともに次のように書かれている。

*être* の主語としてのみ用いられる。属詞が名詞・代名詞の場合に限り人をさすことができる。

*C'est magnifique !* すばらしい!

*Ce sont des touristes allemands.* この人たちはドイツ人の観光客です。

*Est-ce lui qui a tort ?* まちがっているのは彼だろうか。

『新初等フランス語教本《文法編》』白水社

また『新・フランス語文法』(朝日出版社、俗称「阪大文法」) の指示代名詞 *ce* の解説は次のようになっている。

**ce** 性数の変化はしない。*être* の主語として用いられる。

*C'est bien.* それで結構です。

*C'est un plaisir de travailler avec ces gens.*

あの人たちと一緒に仕事をするのは楽しい。

これ以外に「同定構文」*c'est / ce sont* という名で例文が挙げられている。

*C'est un vin chilien.* これはチリのワインです。

*C'est un nouveau professeur.* あの人新しい先生です。

*Ce sont des légumes printaniers.* これらは春の野菜です。

しかしながらどちらの教科書にも指示代名詞 **ce** が「何を指す代名詞なのか」ということが説明されていない。

(2) *il / elle* と *ce* の違いは人と物の違いではない。

英語の影響からか「*il / elle = he / she*」「*ce = it*」と考えてしまう学習者がいるが、これは誤りである。英語では *he / she / it* はすべて人称代名詞であり、*he / she* は人、*it* は物という区別がある。

a. *He is my friend.* 彼は私の友人です。

b. *She is a nurse.* 彼女は看護師です。

c. *It is my bike.* それは私の自転車です。

一方、フランス語では人称代名詞 *il / elle* は人も物も指し、英語の *it* のような物専用の人称代名詞がない。

d. *Paul est un ami. Il est grand.* ポールは友達だ。彼は背が高い。

e. *Mon vélo est costaud. Il est vert.* 私の自転車は頑丈だ。それは緑色だ。

(3) フランス語の *ce* は英語の *this / that* と同じく指示代名詞である。両方とも目の前にある物を指す直示 (*deixis*) に用いられる。

a. *Nous voilà arrivés. C'est ma maison.*

やっと着きました。これが私の家です。

b. *We arrived. This is my house.*

着きました。これが私の家です。

どちらもふつうは物を指すが、動詞が *être (be)* で属詞 (主格補語) が名詞の場合に限り人を指すというのも似ている。

c. *Sandrine. C'est Claude.*

サンドリーヌ。こちらクロードです。

d. *Mary. This is Augustus.*

メアリー。こちらオーガスタスです。

しかし、フランス語の *ce* と英語の *this* が似ているのはここまでである。

(4) 指示代名詞と人称代名詞というちがいがあいながら、*ce* はむしろ *it* の用法と重なることが多い。

a. 物を指して

*Qu'est-ce que c'est ? — C'est une montre.*

「それは何ですか」「これは腕時計です」

*What is that? — It is a watch.*

「それは何ですか」「これは腕時計です」

b. 人を指して

*Qui est devant la porte ? — C'est le facteur.*

「ドアの前にいるのは誰ですか」「郵便屋さんです」

*Who is at the door? — It's the postman.*

「ドアの前にいるのは誰ですか」「郵便屋さんです」

c. 強調構文で

*C'est Paul qui est venu le premier.*

最初に来たのはポールです。

*It is Peter who came first.*

最初に来たのはピーターです。

品詞が異なるのだが、*ce* と *it* はこのように使い方が似ているため対応関係にある。これも学習者の混乱を招く原因のひとつである。

(5) *il est / c'est* の対立は3人称に限られる

人称代名詞 *il / elle* と指示代名詞 *ce* とが主語位置で競合するのは3人称 (単数・複数) に限られる。

a. **Que fait votre père ? — {Il est / \*C'est }médecin.**

「お父さんは何をしてらっしゃいますか」「父は医者をしています」

b. **Qui est l'homme vêtu de noir ? — {C'est / \*Il est } l'avocat de mon père.**

「黒い服を着た人は誰ですか」「あの人は父の弁護士です」

1・2 人称では人称代名詞しか使わない。

c. **Moi, { je suis / \*c'est } le secrétaire du ministre des finances.**

私は財務大臣の秘書です。

(6) **il est** と **c'est** の使い分けをしなくてはならない第一のケースは属詞が名詞のときである。とりわけ属詞が職業・国籍などを表す名詞のときに、はっきりとした使い分けがある。

a. **Mon frère ? {Il est / \*C'est } ingénieur chez E.D.F.**

私の兄ですか。兄はフランス電力公社のエンジニアです。

b. **Cet homme-là ? {C'est / \*Il est } le professeur de piano de ma fille.**

あの男の人ですか。あの人は娘のピアノの先生です。

属詞が代名詞のときは **c'est** を用いる。**il est / elle est** は使わない。

c. **Qui est là ? — C'est moi.** [属詞は人称代名詞強勢形]

「そこにいるのは誰ですか」「私です」

d. **Vous êtes étudiant ? — Oui, c'est ça.** [属詞は指示代名詞]

「あなたは大学生ですか」「ええ、そうです」

属詞が形容詞・過去分詞・前置詞句などの場合、主語が人のときは **il est** を用いる。**c'est** は使えない。

e. **Pauvre Hélène. Elle est triste.**

かわいそうなエレーヌ。彼女は悲しんでいる。

**Regarde Paul. Il est en colère.**

ポールをごらん。怒っているよ。

主語が物を指し、属詞が主語の性質・形状・場所などを表すときは **il est** を用いるのがふつうである。

g. **De quelle couleur est ta voiture ? — {Elle est / \*C'est } rouge.**

「君の車は何色だい」「赤だよ」

h. **Où est mon dictionnaire ? — {Il est / \*C'est } sur la table.**

「私の辞書はどこにある」「テーブルの上だよ」

(7) 転位構文で転位された名詞が総称のときは **c'est** を、特定の個体のときは **il est** を用いる。例文 a. b.は朝倉季雄『フランス文法ノート』（白水社）より。

a. **Les canards, c'est joli, mais ce n'est pas propre.**

あひるって、きれいだけど、不潔だわ。

b. **Ah ! les cochons ce n'est pas propre ! — Mes cochons ils sont jolis, ils sont propres !**

「ああ、豚って不潔だわ」「わたしの豚はな、きれいだよ。清潔だよ」

動詞が **être** 以外のとき、総称には **ça** を、特定の個体には **il(s)** を用いる。

c. **Les enfants, ça salit tout.** 子供って何でも汚してしまう。

d. *Mes enfants, ils salissent tout.* うちの子供たちは何でも汚してしまう。

(8) 問題なのは *il est* も *c'est* も使われる次のような例である。主語は物で属詞は主語の性質を表す形容詞である。例文は朝倉季雄『フランス文法ノート』(白水社) より。

a. *Un grand salon ! — Non, grand ? il n'est pas grand.*

「大きな客間ですね」「いいえ、大きいとおっしゃるの？ 大きくはありませんわ。」

b. *Et voilà l'étable ! c'est joli, hein ?*

で、これが馬小屋だ。きれいだろう、どうだ。

朝倉はこのようなケースについて次のように述べている。

例 15 [=a.]の *il* は *un salon* ではなく、*le (ce, notre) salon* の代理語である。前文で *un salon* とあるが、次の文では *Le (Ce, Notre) salon n'est pas grand.* となり、*salon* が反復されるから、これを *il* で代理させたのである。(…) 例 16 [=b.] でも、特定名詞 *l'étable* を *elle* で置きかえて *elle est jolie !* ということができる。それなのに *ce* を用いたのは、*l'étable* という個体の代理語としてではなく、その外観・周囲の印象を指し示して、形容詞を浮き彫りにするためである。景色を見て *C'est beau.* 「美しい」、エッフェル塔を見て *C'est haut !* 「高いね」というのも同じ具合である。それゆえ、個体そのものを指すか、外観・印象を指すかに従って、次のように、*il(s), elle(s)* も *ce* も可能となることが多い。

17) *Regardez ce coucher de soleil, il est (c'est) magnifique.*

あの夕日をごらんください。すばらしいですね。

18) *C'était si beau, ces petites maisons.*

とてもきれいでした、あの小さな家は。[*Elles étaient si belles* も可]

個体そのものを指し示すとは考えられない次例では *il(s), elle(s)* は用いられない。

19) *Cette table là-bas, ce sera très bien.*

(レストランで) あそこのテーブルなら、とてもよさそうね。(=*si on s'assied à cette table là-bas*)

20) *Ce carrefour, c'est toujours pareil. Tous les jours, il y a quelque chose. Hier, c'est un cycliste qui s'est fait renverser par un camion.*

あの交差点はいつだって同じなんです。毎日何かが起こっています。きのうは自転車に乗っていた男がトラックにはねられました。(=*Ce qui arrive dans ce carrefour...*)

21) *J'aime travailler la nuit. — Oui, c'est tranquille.*

「わたしは夜仕事をするのが好きよ」「ええ、静かですからね」

(=*l'atmosphère de la nuit*)

(朝倉季雄『フランス文法ノート』白水社)

### 【考察】

朝倉はこのように、コピュラ文の主語が特定の個体を指すときは *il est*、特定の個体ではなくその外観や印象を指すときは *c'est* を用いるとした。この分析は正しいのだが、問題はなぜそのような使い分けがあるのかである。

その理由は、*il / elle* が人称代名詞で、*ce* は指示代名詞であるという点に尽きる。人称代名詞 *il / elle* にははっきりとした先行詞がある。このため *il / elle* は特定の個体を指すのである。



a. *Ça, c'est ma voiture. Elle est vieille, mais elle roule bien.*

これが私の車だ。古いがよく走る。[elleの先行詞はma voiture]

一方、ceは人称代名詞ではなく指示代名詞である。このため先行詞を持たず、直示の場合は指差しなどを伴って物を直接指し、文脈指示の場合はテキスト上の近接性に基づいて先行する語群を指す。次の例文c.でceがune cabaneを指していると解釈されるのは、une cabaneを先行詞としているからではなく、テキスト上で近くにあるからという理由に過ぎない。

b. *Tenez. C'est un cadeau pour vous.*

ほら、これはあなたへのプレゼントです。

→ Ceは話し手が差し出した物を直示的に指す。[現場指示]

c. *Il a trouvé une cabane au fond de la forêt. C'était la maison du sorcier.*

彼は森の奥に小屋を見つけた。それは魔法使いの家だった。

→ ceはune cabaneを指す。[文脈指示]

d. *Il ne reviendra pas. C'est sûr.*

彼は戻って来ないだろう。それは確かだ。

→ Ceは前文の内容を指す。[文脈指示の一種で明確な先行詞がない]

魚取りに喩えて言えば、il est...は釣り竿を使った一本釣りのようなものである。狙った魚を一尾だけ釣り上げることができる。これにたいしてc'estは投網のようなもので、網を投げた範囲にあるものは全部ごっそり網の中に入る。

次のe.ではelleが先行詞cette histoireを一本釣りしているが、f.ではceにはそれができないので、前文の内容全体をごっそり拾っている。

e. *Je ne comprends pas cette histoire. Elle est curieuse.*

私にはこの話がわからない。(この話は)奇妙だ。

f. *Je ne comprends pas cette histoire. C'est curieux.*

私にはこの話がわからない。(私がわからないのは)奇妙だ。

c'estが特定の個体ではなく、個体を取り巻く状況や個体が与える印象や漠然と状況を指すのはこのためである。

(9) 次の場合、コピュラ文〈A est B〉でc'estを使うのが義務的である。

a. 属詞が人称代名詞の強勢形するとき

*L'État, c'est moi.* 朕は国家なり。

b. 属詞が動詞の不定形するとき

*Vouloir, c'est pouvoir.* 成せば成る。

c. 主語が〈ce+関係節〉のとき

*Ce qui m'intéresse, c'est l'histoire de cette ville.*

私が興味があるのはこの町の歴史だ。

d. 属詞がqueで始まる節のとき

*Une chose sûre, c'est que ce projet n'aurait pas réussi sans lui.*

ひとつ確かなのは、彼がいなければこの計画は成功しなかつたであろうということだ。これ以外の場合でも、フランス語ではA, c'est B.の構文が好まれる。

*Le temps, c'est de l'argent.* 時は金なり。

La capitale de la France, c'est Paris. フランスの首都はパリだ。

(10) しかしここまで考察を進めても、il est と c'est の次のような使い分けには説明できない点が残る。

a. Qui est Fellini ? — {C'est / \*Il est } un metteur en scène italien.

「フェリーニってだれですか」「イタリアの映画監督です」

→Fellini という特定の個体を指す先行詞があるのに il est ではなく c'est を使うのはなぜか。

b. Tiens, prends ce stylo. {Ce sera / \*Il sera } le tien.

この万年筆を取りなさい。これはあなたの物です。

→ここでも ce stylo という特定の個体を指す先行詞に c'est を使うのはなぜか。

c. Regarde cette pauvre chienne. Comme {elle est / \*c'est} malade !

あの可愛そうな雌犬をご覧ください。何て具合が悪そうだろう。

d. Oh, cette écharpe ! {C'est / Elle est } charmant(e).

あのスカーフ。素敵だわ。

→c.も d.も属詞は malade, charmant という形容詞だが、c.では elle est しか使えないのに、d.では c'est も elle est も使えるのはなぜか。

e. La voiture que j'ai vendue à Pierre est tombée en panne ? Eh, bien, qu'il se débrouille. {Elle est / \*C'est } à lui maintenant.

私がピエールに売った車が故障したって？ 自分で何とかするんだな。あの車はもうあいつのだから。

→目の前の物を指すときは、Il est à toi, ce stylo ? / C'est à toi, ce stylo ? 「この万年筆、君の？」のように il est も c'est も使えるのに、この例では c'est が使えないのはなぜか。

(例文は Burston, J. L. & M. M. Burston, “The use of demonstrative and personal pronouns as anaphoric subjects of the verb ÊTRE”, *Linguisticae Investigationes* 5-2, 1981 より)

## 5.2. コピュラ文の類型と指示的名詞句・非指示的名詞句

(11) 記述文と指定文

コピュラ文〈A est B〉は複数の意味解釈を持つ複雑な文である。

a. Horatio est le meilleur ami d'Hamlet.

ホレイショはハムレットの一番の親友だ。

b. Le meilleur ami d'Hamlet est Horatio.

ハムレットの一番の親友はホレイショだ。

例文 a.では、主語 Horatio は固有名で特定の個体を指す。固有名の使用は共有知識を前提とするので、Horatio は話し手も聞き手も知っている人物である。a.は既知の個体を指す主語に「ハムレットの一番の親友」という属性を付与している。

一方、例文 b.はハムレットの一番の親友が誰かわからないという状況で、それはホレイショだと伝える文である。主語 le meilleur ami d'Hamlet は誰だかわからないので特定の個体を指しているとは言えない。言わば中身のない空の箱である。b.は空の箱

に *Horatio* という特定の個体を入れている文である。

a.の主語 *Horatio* は指示的 (*référentiel*) で、属詞の *le meilleur ami d'Hamlet* は非指示的 (*non référentiel*) である。指示的主語に非指示的な属性を付与するコピュラ文を「記述文」 (*phrase prédicationnelle*) と呼ぶ。b.の主語 *le meilleur ami d'Hamlet* は非指示的で属詞の *Horatio* は指示的である。非指示的な主語に指示的な属詞を割り当てるコピュラ文を「指定文」 (*phrase spécificationnelle*) と呼ぶ。

**N.B. 1** 東郷 (1988) (1993)では「記述文」と「同定文」という用語を用いていた。しかし「同定文」は別のタイプのコピュラ文の名前として適切なため、ここではその代わりに「指定文」と呼ぶことにする。

**N.B. 2** *Fauconnier* のメンタル・スペース理論では、非指示的な名詞句は「役割」 (*role*) 、指示的な名詞句は「値」 (*value*) と呼ぶ。これを用いれば、記述文は値名詞句に役割を付与する文、指定文は役割名詞句に値を付与する文と簡潔に定義することができる。

(12) 記述文は主語がどのような人・物であることを述べる文である。したがって記述文の属詞は属性 (性質) を表すものでなくてはならない。形容詞や一部の副詞は属性を表すので、属詞や副詞が形容詞のコピュラ文はすべて記述文である。

- a. *Mon père est sévère.* 私の父は厳しい。
- b. *La Terre est ronde.* 地球は丸い。
- c. *Ce vin est très bien.* このワインはすばらしい。

固有名は指示的なので属性を表すことはない。したがって固有名は記述文の属詞になることができない。次の文の *Pierre Dupont* は指示的な固有名ではなく、「ピエール・デュポンという名前」という意味で使われている。

- d. *Je suis Pierre Dupont.* 私はピエール・デュポンといます。

固有名は記述文の属詞として用いるとしばしば比喩的な意味になる。

- e. *Il est Don Juan.* あいつはドンファン (女たらし) だ。  
名詞句は非指示的な解釈のときに記述文の属詞になる。

- f. *Ce port est le poumon économique de ce pays.*

この港はこの国の経済の要である。

(13) 指定文はある役職や名称に該当するのは誰か・どれかを述べる文である。したがって指定文の属詞になれるのは、固有名や指示的解釈の定名詞句や代名詞である。

- a. *Le fondateur de cet ordre religieux est Robert de Molesme.* [属詞は固有名]  
この宗派の創設者はロベール・ド・モレームです。
- b. *La capitale de la Cameroon est Yaoundé.* [属詞は固有名]  
カメルーンの首都はヤウンデです。
- c. *Le président de ce club est le père de Jean depuis avril.* [属詞は定名詞句]  
4月からこのクラブの会長はジャンのお父さんだ。
- d. *Ma voiture, c'est celle-ci.* [属詞は指示代名詞]  
私の車はこれです。

不定名詞句は指示的ではないので指定文の属詞にならない。

(14) *il est / c'est* の使い分け 《暫定版》

記述文と指定文というコピュラ文の類型を立てることによって、*il est / c'est* の使い

分けを次のように簡潔に記述することができる。ただし、これは暫定版であり、後により正確なものを示す。

記述文の主語には人・物の区別なく *il est* を用いる。指定文の主語には人・物の区別なく *c'est* を用いる。

【記述文】

a. [人] *Que fait votre frère dans la vie ? — Il est dentiste.*

「お兄さんは何をしておられますか」「兄は歯科医です」

b. [物] *Si la Corée du Nord est une menace pour le monde entier, ici elle est une attraction.*

(NHK BS 放送の FR2 ニュース、2017.9.11)

北朝鮮は世界にとっての脅威だが、ここでは娯楽だ。

【指定文】

a. [人] *Qui est l'auteur de Madame Bovary ? — C'est Flaubert.*

『ボヴァリー夫人』の作者は誰ですか」「フロベールです」

b. [物] *Quel est le plus haut sommet des Alpes ? C'est le mont Blanc.*

「アルプス山脈の最高峰は何ですか」「モンブランです」

(15) 記述文の属詞をたずねる疑問文には *comment* を用いる。

a. [人] *Comment est le nouveau professeur de maths ? — Il est sympa.*

「新しい数学の先生はどんな人だい」「感じがいいよ」

b. [物] *Comment est ton nouvel appartement ? — Il est spacieux et confortable.*

「君の新しいアパルトマンはどうだい」「広くて住み心地がいいよ」

ただし、人の職業をたずねる疑問文は次を用いる。

c. *Que fait votre mère dans la vie ? — Elle est kinésithérapeute.*

「お母さんは何をしておられますか」「運動療法士です」

国籍をたずねるには次のように問う。

d. *De quelle nationalité est Giulietta ? — Elle est italienne.*

「ジュリエッタはどこの人ですか」「イタリア人です」

人の状態を問うときに *que / qu'est-ce que* を用いることもある。

e. *Que sera-t-il dans dix ans ? — Il sera à la retraite.*

「10年後に彼はどうなっているでしょう」「退職しているでしょう」

(16) 指定文の属詞をたずねる疑問文は次のようになる。

人には *qui / qui est-ce qui* を用いる。

a. *Qui est l'auteur de Bonjour Tristesse ? — C'est Françoise Sagan.*

「『悲しみよこんにちは』の作者は誰ですか」「フランソワーズ・サガンです」  
やや文語的だが *quel* を用いることもできる。

b. *Quel est le plus fou de nous deux ?*

私たち二人のうちいちばん頭がおかしいのはどっちだ？

物には *quel* を用いる。

c. *Quel est le fleuve le plus long du monde ? — C'est le Nil.*

「世界で一番長い川は何ですか」「ナイル川です」

日本語の「どこ」に影響されて *où* を使わない注意が必要である。

d. {Quelle / \*Où } est la capitale de l'Estonie ? — C'est Tallinn.

「エストニアの首都はどこですか」「タリンです」

(17) 記述文と指定文には次のように多くの統語的なちがいがあある。

a. 記述文の属詞は中性代名詞 *le* で受けることができるが、指定文の属詞はできない。*le* は先行詞の内包だけを受ける非指示的代名詞だからである。

i) *Maxime est le meilleur ami de Xavier.* [記述文]

マキシムはグザビエの一番の親友だ。

→ *Maxime l'est, le meilleur ami de Xavier.*

マキシムはそうだ。グザビエの一番の親友だ。

ii) *Le meilleur ami de Xavier est Maxime.* [指定文]

グザビエの一番の親友はマキシムだ。

→ *\*Le meilleur ami de Xavier l'est, Maxime.*

b. 指定文の属詞は *c'est ... qui* の強調構文の焦点位置に置くことができるが、記述文の属詞はできない。強調構文は形を変えた指定文で、強調構文の焦点位置には指定文の属詞と同じく指示的名詞句しか置くことができないからである。

i) *Le mont Blanc est le plus haut sommet des Alpes.* [記述文]

モンブランはアルプス山脈の最高峰だ。

→ *\*C'est le plus haut sommet des Alpes qui est le mont Blanc.*

ii) *Le plus haut sommet des Alpes est le mont Blanc.* [指定文]

アルプス山脈の最高峰はモンブランだ。

→ *C'est le mont Blanc qui est le plus haut sommet des Alpes.*

アルプス山脈の最高峰はモンブランだ。

c. 記述文の属詞は *aussi* で修飾したり、*ne... que* で制限できるが、指定文の属詞はできない。

i) *Paris est le centre des arts.* パリは芸術の都だ。[記述文]

→ *Paris est aussi le centre des arts.* パリは芸術の都でもある。

→ *Paris n'est que le centre des arts.* パリは芸術の都でしかない。

ii) *Le centre des arts est Paris.* 芸術の都はパリだ。[指定文]

→ *\*Le centre des arts est aussi Paris.* 芸術の都はパリでもある。

→ *\*Le centre des arts n'est que Paris.* 芸術の都はパリでしかない。

d. 記述文は複合過去などの完了相にできるが、指定文はできない。

i) *La Chine est le pays le plus peuplé du monde.* [記述文]

中国は世界でいちばん人口の多い国である。

→ *La Chine a été le pays le plus peuplé du monde.*

中国は世界でいちばん人口の多い国であった (ことがある)。

ii) *Le pays le plus peuplé du monde est la Chine.* [指定文]

世界でいちばん人口の多い国は中国である。

→ *\*Le pays le plus peuplé du monde a été la Chine.*

**N.B.** 指定文は半過去などの未完了相にはすることができる。

*A cette époque, le pays le plus peuplé du monde était la Chine.*

その当時、世界でいちばん人口の多い国は中国であった。

e. 記述文は準コピュラ動詞の *devenir, rester* などを動詞とすることができるが、指定文はできない。

i) *Abeno Harukasu est le plus haut bâtiment du Japon.*

アベノハルカスは日本でいちばん高い建物ある。

→ *Abeno Harukasu {devient / reste } le plus haut bâtiment du Japon.*

アベノハルカスは日本でいちばん高い建物 {になる / であり続ける}。

ii) *Le plus haut bâtiment du Japon est Abeno Harukasu.*

日本でいちばん高い建物はアベノハルカスである。

→ *\*Le plus haut bâtiment du Japon {devient / reste } Abeno Harukasu.*

(18) 記述文と指定文という区別を用いて *il est / c'est* の使い分けが説明できたように見えるかもしれない。しかし次のような例は説明することができない。

a. *Qui est Fellini ? — {C'est / \*Il est } un metteur en scène italien.*

「フェリーニってだれですか」「イタリアの映画監督です」

b. *Qu'est-ce que c'est, cette boîte noire ? — {C'est / \*Il est} un nouveau type d'ordinateur.*

「この黒い箱は何ですか」「それは新しいタイプのコンピュータです」

c. *Il n'a rien vu, rien su. {Il est / C'est} un voyageur comme un autre.*

彼は何も見ず何も気づかなかった。彼はごくふつうの旅行者だ。

### 【考察】

先に指定文の主語は *qui* でたずねるとした。指定文の主語は非指示的名詞句で属詞は指示的名詞句である。

L'auteur de *L'Exil et le Royaume* est Albert Camus.

非指示的

指示的

『追放と王国』の作者はアルベール・カミュだ。

ところが a. の主語 *Fellini* は固有名であり指示的名詞句である。また答の属詞 *un metteur en scène italien* は非指示的名詞句である。それならば答は記述文であるはずなのに *il est* ではなく *c'est* を用いている。これは説明できない。

b. の答の主語 *ce* が指しているのは *cette boîte noire* で指示的名詞句である。a. と同様、主語が指示的名詞句で属詞が非指示的名詞句なので、記述文であるはずなのに *c'est* を用いている。これも説明できない。

c. では *il est* も *c'est* も使うことができる。実は属詞が不定冠詞付き名詞句の場合は *c'est* を使うことが多い。不定冠詞付き名詞句は非指示的なので、指定文の属詞にならないはずである。それなのに指定文のように *c'est* を使うのはなぜだろう。

i) *Nous avons mis au point une voiture électrique la plus performante du monde.*

{*C'est / Elle est*} *un miracle de la technologie.*

わが社は世界で最高性能の電気自動車を開発した。これは技術の生み出した奇跡である。

### 5.3. Declerck の英語のコピュラ文の類型

#### (19) 英語のコピュラ文

Declerck, R. “ ‘It is Mr. Y’ or ‘He is Mr. Y’?”, *Lingua* 59, 1983. では英語のコピュラ文の主語の *he / she* と *it* の使い分けが扱われている。この使い分けは一見するとフランス語の *il est / c'est* の使い分けと似ているが、ちがうところもある。

- a. There's a policemen at the door. — Who is {it / he }?

「ドアの前に警官がいる」「あれは誰だ？」

- b. Last night a man was arrested by the London police and charged with the murder of Annie Jones. {It was / He is} Mr. James Smith, of Sweetham Street, Bexton.

昨夜、アニー・ジョーンズ殺しの容疑で男がロンドン警察に逮捕されました。男はベクストンのスウィートナム通りに住むジェームズ・スミスです。

- c. I know the man in the photograph. {It / \*He} is John!

写真の男を知っているよ。これはジョンだ。

- d. Who is Mr. Arnow? — {He / \*It} is a Russian.

「アーノウって誰ですか」「ロシア人です」

英語では *he / she* は人を指し、*it* はふつうは物を指すが人を指すこともある。物には *it* しか使わないので、*he / she* と *it* と使い分ける必要が生じるのは主語が人の場合に限られる。フランス語では *il / elle* も *ce* も人にも物にも用いるので、どちらも場合にも使い分けが必要になり、英語よりも事情は複雑だと言える。

(20) Declerck は次のようなコピュラ文の分類を提案している。

#### (A) 指定的同定文 (specificationally identifying sentence)

主語は変数（非指示的名詞句）を表し補語がその値（指示的名詞句）を与える文。

- a. The bank robber is John Thomas.

銀行強盗は（誰かというとはそれは）ジョン・トーマスだ。

- b. The only man that can help you is the President himself.

あなたを助けられるただ一人の人は（誰かというとはそれは）大統領その人だ。

指定的同定文は *who / which one* を使った疑問文の答となる。

- c. {Who / Which one} is the bank robber?

誰が / どの人が銀行強盗ですか。

- d. {Who / Which one} is the man who can help me?

私を助けられる人は誰 / どの人ですか。

#### (B) 記述文 (predicational sentence)

指示的な主語についてその属性や役割や分類を述べる。

- a. John is a teacher. ジョンは教師です。

- b. Mary is a pretty girl. メアリーはかわいい女の子です。

記述文は *what* を使った疑問文の答であり、*what* を用いた擬似分裂文になる。

- c. What is your friend? — He is a teacher.

「あなたのお友達は何をしている人ですか」「彼は教師です」

- d. What my friend is is a teacher.

私の友達がそうであるのは教師です。

記述文だけが比較や程度を表すことができる。

e. John is a better teacher than you.

ジョンは君よりいい先生だ。

f. He is to a certain point out leader.

彼はある程度まで我々のリーダーだと言える。

(C) 記述的同定文 (descriptively identifying sentence)

指示的主語についてさらに情報を付加して、それがどんな人なのか (どんな物なのか) を聞き手に知らせる文。

a. Who is that man? — He is John's brother.

「あの人は誰ですか」「ジョンのお兄さんです」

b. Mike? Who is Mike? — He is my neighbor.

「マイク? マイクって誰ですか」「私のお隣さんです」

記述的同定文は who でたずねる質問の答になる。この点は指定的同定文と同じように見えるが、間接疑問文でちがいが出る。

c. The girl asked us who is the captain. [指定的同定文]

女の子は私たちに誰が船長なのかたずねた。

d. The girl asked us who the captain is. [記述的同定文]

女の子は私たちにあの船長という人は何者なのかとたずねた。

指定的同定文と異なり、記述的同定文には which one は用いない。また指定的同定文は The following is NP<sub>1</sub> : NP<sub>2</sub> の形にできるが、記述的同定文はできない。

e. The following person is the bank robber : John Thomas. [指定的同定文]

次の人物が銀行強盗だ : ジョン・トーマス

f. \*The following person is Mike : my neighbor. [記述的同定文]

次の人物がマイクだ : 私のお隣さん。

(D) 同一性文 (identity statement)

主語も補語も指示的であり、両者が同一であることを述べる。ふつう is にアクセントを置いて発音する。

a. Dr. Jekyll is Mr. Hyde.

ジキル博士はハイド氏だ。

b. The Morning Star is the Evening Star.

明けの明星は宵の明星だ。

(21) Declerck のコピュラ文の呼び名は長くて面倒なので、ここでは簡略化して次のように呼ぶ。同一性文はここでは考えない。

指定的同定文 → 指定文

記述文 → 記述文

記述的同定文 → 同定文

Declerck が提案する仮説は次のような簡潔なものである。

人を主語とする英語のコピュラ文では、指定文に it を使い、記述文と同定文には he / she を使う。



a. 指定文

Who is the bank robber? — {It / \*He} is John Thomas.

「銀行強盗は誰ですか」「それはジョン・トーマスです」

b. 記述文

What is John? — {He / \*It} is a teacher.

「ジョンは何をしている人ですか」「彼は教師です」

c. 同定文

Mike? Who is Mike? — {He / \*It} is John brother.

「マイク？ マイクって誰ですか」「彼はジョンのお兄さんです」

(22) フランス語ではどうなるか

フランス語と比較すると、指定文と記述文ではよく似た振る舞いをするが、同定文で決定的にちがうことがわかる。またフランス語では人だけでなく、主語が物の場合にも使い分けがあるので両方示す。

a. 指定文

[人] Qui est le Président de la République ? — {C'est / \*Il est} Emmanuel Macron.

「共和国大統領は誰ですか」「エマニュエル・マクロンです」

[物] Quel est le plus haut sommet des Alpes? — {C'est / \*Il est} le mont Blanc.

「アルプス山脈の最高峰は何ですか」「モンブランです」

b. 記述文

[人] Que fait Sandrine dans la vie ? — {Elle est / \*C'est} dactylo.

「サンドリーヌの職業は何ですか」「彼女はタイピストです」

[物] La tour Eiffel a été construite en 1889. Plus qu'un monument, *elle* est le symbole de Paris et de la France. *Elle* est un des bâtiments payants les plus visités du monde.

エッフェル塔は 1889 年に建設されました。単なる建造物というより、パリとフランスのシンボルです。エッフェル塔は入場が有料の建物の中で世界でいちばん入場者の多いもののひとつです。

c. 同定文

[人] Qui est la femme qui porte un chapeau rouge ? — {C'est / \*Elle est} Brigitte Giraud. Elle a remporté le Prix Goncourt de 2022 avec son roman *Vivre vite*.

「赤い帽子をかぶっている女性は誰ですか」「あれはブリジット・ジローです。彼女は『生き急ぐ』という小説で 2022 年のゴンクール賞を受賞しました」

[物] Qu'est-ce que c'est que ce fruit bizarre ? — {C'est / \*Il est} un durian. Il est bon, mais il a une odeur repoussante.

「この奇妙な果物は何ですか」「それはドリアンです。おいしいのですが強烈な臭いがあります」

(23) 英語とフランス語の主語代名詞の使い分けのちがいは次のようにまとめられる。

|     | 英 語        | フランス語       |
|-----|------------|-------------|
| 指定文 | it is      | c'est       |
| 記述文 | he/she is  | il/elle est |
| 同定文 | he /she is | c'est       |

上の表が示すように、英語とフランス語の大きなちがいは、英語では同定文に **he / she is** を用いるが、フランス語では **ce** を使うという点にある。このちがいを最もよく示しているのが次の疑問文とその答である。

- a. The man over there, who is {he / \*it}? — (He / \*It) is my cousin.  
「あそこの男の人は誰ですか」「彼は私の従兄弟です」
- b. L'homme qui est là-bas, qui {est-ce / \*est-il} ? — {C'est / \*Il est } mon cousin.  
「あそこの男の人は誰ですか」「彼は私の従兄弟です」

#### 5. 4. さらなる問題

##### 5. 4. 1. 記述文に **c'est** を用いる場合：拡大指示 (*référence dilatée*)

(24) ここまでは記述文では人にも物にも **il est / elle est** を用いるとしてきた。

属詞が形容詞のコピュラ文は典型的な記述文である。形容詞の場合、人にも物にも **il est / elle est** を用いるのが基本である。

- a. Regarde ce garçon. *Il est tout mouillé.*  
あの男の子を見てごらん。びしょ濡れだよ。
- b. J'ai une voiture allemande. *Elle est rouge.*  
私はドイツ製の車を持っている。それは赤い。

**mouillé, rouge** などは個体の属性を表す形容詞である。特に **rouge, rond** のように個体の内的属性 (*propriété interne*) を表す形容詞には **il est / elle est** しか使えない。

しかしすでに見たように、記述文が特定の個体の持つ属性ではなく、その個体を含む周囲の状況や、個体が話し手に与える主観的印象など表すときは好んで **c'est** が用いられる。次の例文では **ce** が指しているのは日没だけではなく、日没の周囲の状況を含む広い指示である。このような場合、人称代名詞ではなく指示代名詞を用いる。

- c. Regarde le coucher du soleil. *C'est {beau / magnifique }.*  
日が沈むところを見てごらん。{きれいだ / すばらしい}。

##### 5. 4. 2. 属詞が職業・国籍・身分などを表す記述文

(25) 主語が人で属詞が職業・国籍・身分などを表すとき、記述文であるにもかかわらず **Il est / Elle est un N.** の容認度は極めて低い。

- a. *??Il est un médecin.* 彼は医者だ。  
よく知られているように、このような場合は不定冠詞を略すことで解決する。
- b. *Il est médecin.*

**N.B.** 容認度が極めて低いのは主語が3人称代名詞の場合である。主語が1・2人称や固有名詞の場合はやや容認度が上がる。それでも次のような文脈が必要である。

i) [外科医ではないのに手術しろと言われて]

Mais je suis un médecin, pas un chirurgien.

でも私は一般医であって外科医ではありませんよ。

この問題を扱った数少ない研究に次のものがある。

Jeunot, D. (1983) « Il est médecin (pourquoi pas ?) », Fisher, S. & J. J. Franckel (eds) *Linguistique, énonciation. Aspects et détermination*, Editions de l'Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales.

藤田康子(1992)「« Pour Oliver, elle est un écrivain. » — IL est un N 文が成立する要因について」『年報・フランス研究』26、関西学院大学文学部。

主語が *ce* のときは属詞は *un N* なので、ここから常に問題となる次のような最小対が生じる。

c. *Il est médecin.* 彼は医者だ。

d. *C'est un médecin.* この人は医者だ。

c.の属詞の無冠詞名詞と d.の *un N* を入れ替えた次の文は容認度が低くなる。

e. ?*Il est un médecin.*

f. \**C'est médecin.*

(26) ではなぜ特に主語が3人称代名詞 *il / elle* のときに *un N* の容認度が低いのだろうか。それは主語と属詞の両方にかかわる次のような理由があるからだと考えられる。

[A] 3人称代名詞 *il / elle* は言語的コントロールを受ける代名詞である。つまり明確な先行詞がある。たとえば *un garçon* → *il*、*une cravate* → *elle* のように。*il* が *un garçon* を指すとき、その指示対象は [*garçon*] という集合の一員として分類済み (*classifié / catégorisé*) である。

[B] 不定冠詞の付いた *un N* は分類的 (*sortal*) である。*C'est un stylo à bille.* 「これはボールペンです」という文は、指示対象が [ボールペン] という集合に属していることを表している。

この [A]と[B]を掛け合わせると次の結論を得る。

[C] 属詞が職業などを表すコピュラ文で主語が3人称代名詞の *Il est un N.* の容認度が低いのは、分類済みの *il* を属詞でさらに分類しようとしているからである。

ここから *C'est un N.* では逆に不定冠詞が必要なことも理解することができる。

[D] *ce* は語用論的コントロールを受ける指示代名詞であり、*il* のような明確な先行詞を持たない。このため *ce* が指す指示対象はまだ分類されていないもの (*non classifié / non catégorisé*) である。だからこそ *ce* は中性なのである。*C'est un N.* は未分類の主語を *N* に分類する文である。したがって属詞には分類的な *un N* が必要なのである。

### 5.4.3. 主語が物の記述文

(27) これと似たようなことは、主語が物を指す記述文についても起きる。*Il est un N* の形を取る記述文は確かにある。

a. L'opéra Garnier, ou palais Garnier, est un théâtre national qui a la vocation d'être une académie de musique, de chorégraphie et de poésie lyrique ; **il est** un élément majeur du patrimoine du 9<sup>e</sup> arrondissement de Paris et de la capitale. (Wiki français)

ガルニエのオペラ座はガルニエ宮とも呼ばれていて、音楽とバレエと抒情詩の殿堂となるべく建てられた国立劇場です。それは首都パリの9区の歴史的遺産の中核をなす要素です。

しかし次の文は記述文だが **elle est** の容認度は高くなく、**c'est** の方が好まれる。

b. J'ai acheté une chaise pliante. {?Elle est / C'est} une chaise pratique.

私は折りたたみ椅子を買いました。それは便利な椅子です。

c. Voilà un dictionnaire électronique. [?Il est / C'est] un produit qui se vend bien.

これが電子辞書です。これはよく売れる製品です。

なぜ記述文であるはずなのに **il est** の容認度がそれほど高くないのだろうか。その理由はおそらく **un N** が分類的 (sortal) であるという点にある。〈X est un N〉の N が修飾語句のない単独の名詞の場合、この分類機能が強く前面に出る。

d. ?Il est un dictionnaire. それは辞書です。

e. ?Elle est une tasse à thé. それは紅茶カップです。

このため 〈X est un N〉は同定文の解釈を受けやすいのである。

f. C'est un dictionnaire. それは辞書です。

g. C'est une tasse à thé. それは紅茶カップです。

上に挙げた実例 a. の属詞のように長くて説明的だと分類機能が弱くなり、主語の属性を表す記述文と解釈しやすくなる。

h. **il est** un élément majeur du patrimoine du 9<sup>e</sup> arrondissement de Paris et de la capitale.

それは首都パリの9区の歴史的遺産の中核をなす要素です。

〈X est un N〉が記述文として解釈されやすくなる要因がもうひとつある。次の i. の容認度はそれほど高くないが、j. のようにすると向上する。

i. La crème la plus chère du monde. ?**Elle est** un miracle de la technologie.

世界一高価な美容クリーム。それは技術の生み出した奇跡です。

j. La crème la plus chère du monde. Elle est japonaise. **Elle est** un miracle de la technologie. **Elle est** une folie.

世界一高価な美容クリーム。それは日本製です。それは技術の生み出した奇跡です。それは想像を超えるものです。

j. のように **Elle est...** , **Elle est...** と同じ主語を持つ文を連ねると記述文として解釈しやすくなる。これは次のような理由による。

[A] 3 人称代名詞 **il / elle** は原則としてひとつ前の文の主語を受ける。**il / elle** を用いた文は同一主題を持つ主題連続 (英 **topic continuity**) のマークである。このため連続していると既知の指示対象の説明、つまり記述文と取られやすい。

[B] 指示代名詞 **ce** はいまだ分類されていない (**non classifié**) ものを指す。このため **ce** を主語とするコピュラ文は、新たな物を名指したり、既知の人・物の新たな側面を述べることが多い。このためすでに分類済みの主語でも、新たに分類する場合に **c'est** が用いられる。

- k. [ひと突きで牛を仕留めることができず何度も剣を刺す下手な闘牛士を見て]  
 Tuez-le ! a-t-il crié. Tuez le matador, pas le taureau ! *Ce n'est pas un matador, c'est un boucher !*  
 (Philips, J. K., *Contes sympathiques*, 三修社、1981)  
 「あいつを殺せ」と彼は叫びました。「牛じゃなくて闘牛士を殺せ。あれは闘牛士じゃない。肉屋だ。」

## 6. 一般言語学から見た指示詞の用法

(1) Himmelmann, N. P. (1996) “Demonstratives in narrative discourse: a taxonomy of universal uses”, Fox, B. (ed) *Studies in Anaphora* (Typological Studies in Language 33), John Benjamins. は、起源と類型の異なる 5 つの言語を調査し、普遍的と考えられる指示詞の用法を提案した。5 つの言語は、英語、イク語（ウガンダ）、nunggubuyyn 語（オーストラリアのアボリジニの言語）、タガログ語（フィリピン）、インドネシア語である。

Himmelmann が提案した指示詞の 4 つの用法は次のとおりである。

- a. Situational use 現場指示（直示）
- b. Discourse deictic use 談話指示（テキスト指示）
- c. Tracking use 前方照応（文脈指示）
- d. Recognitional use 記憶指示

### (2) Situational use 現場指示（直示）

現場指示用法は身振りなどを伴い発話の場にあるものを指す用法である。

- a. [指差して] Je prends {*ça / celui-ci*} .
- b. [指差して] I'll take *this (one)*.
- c. [指差して] **これ**ください。 [a. b. c. いずれも東郷の作例]

指示詞の現場指示用法には次の二つの特徴が普遍的に見られるという。

- (A) 直示中心 (deictic center) があり、それに伴って視点 (point of view) がある。
- (B) 談話の世界 (universe of discourse) に新しい指示対象を持ち込む働きがある。

#### 【解説】(A) について

冠詞と異なり指示詞には遠近の区別があることが多い。指示詞の遠近は話し手からの距離によって決まる。

- a. *Ceci est plus solide que cela*. これはそれより頑丈だ。

遠近の原点となる話し手のいる「今・ここ」(hic et nunc) を直示中心 (deictic center) という。またこれに伴って、指示詞を用いるときには「どこから見ているか」が意味の一部として含まれる。この「どこから見ているか」が視点である。たとえば写真を撮るときに「もっと右に寄って」と言うと、撮影者から見て右なのか、写真を撮られる側から見て右なのかという二つの可能性がある。「右」という方向を表す表現にも、「どこから見ているか」という視点に関係している。

視点はまた物語などの文学作品にも広く観察される。

- b. 額をガラスに押しあてて、暁は目を閉じた。地上をはるかに見下ろす窓は思いのほか冷たく、目に灼きつけた裸の上半身がみるみる粟だっていく。

あれから何年になるのだろう。生まれた町を飛び出したのが大学二年の頃 - という事は、そろそろ十五年にもなるのか。あれ以来、一度も家に帰ったこ

とはなかった。戻りたいとも思わなかった。この先も二度と戻るつもりはなかった。そう、今の今までは。(村山由佳『星々の舟』)

小説などの語り (narrative) では、登場人物の視点を取って語られることが多い。上の例は「暁」の視点から描かれている。時間的に遠い過去を表す「あれ」、時間的に未来を表す「この先」、発話時現在を表す「今の今」は、「暁」の視点からの表現である。

《参考文献》

『水声通信』第 19 号 (水声社、2007) 特集「視点をめぐって」

喜田浩平「言語学の様々な『視点』」、井元秀剛「日本語の視点、英仏語の視点」、田口紀子「小説テキストにおける『視点』」などが収録されている。

(B) について

これは主に 3 人称の人称代名詞 (il / elle) や定冠詞との対比を意識したものである。多くの言語で、3 人称の人称代名詞や定冠詞は指示詞に由来する。しかしながら、歴史的变化の過程で指示する力が弱くなる。このために 3 人称の人称代名詞には新しいものを指す力がなく、談話の世界に既に持ち込まれた対象を指す。

c. Une femme est entrée dans la salle d'attente. **Elle** portait un chapeau rouge.

待合室に一人の女性が入って来た。彼女は赤い帽子を被っていた。  
定冠詞も既に談話に登場したものを指すことが多い。

d. Il a trouvé un tournevis et un marteau dans la boîte à outils. Il a pris **le** tournevis.

彼は工具箱の中にドライバーと金槌を見つけた。彼はドライバーを手に取った。  
このように 3 人称代名詞や定冠詞は、一般に指示の連続 (continuité référentielle) を表す。したがって談話の世界に新しい指示対象を持ち込むことがない。

これに対して指示詞はそれまで話題になっていないものに聞き手の注意を向けさせたり、話題として持ち出すときに用いられる。

e. Regarde **ce** pull. Il y a une grosse tache sur la manche.

このセーターを見てよ。袖に大きな染みがある。

g. Retenez bien **ceci** : il ne faut pas envier le bonheur des autres.

このことをよく覚えておきなさい。人の幸福を嫉たんではいけません。  
このため指示詞はしばしば指示の断絶 (rupture référentielle) の記号となる。

(3) Discourse deictic use 談話指示 (テキスト指示)

先行文脈で語られた出来事や文の内容を受ける用法である。これは Halliday & Hasan, *Cohesion in English* (Longman, 1976) の言う text reference 「テキスト指示」、extended reference 「拡大指示」に当たる。

a. [The Queen said :] 'Curtsey while you're thinking what to say. **It** saves time' Alice wondered a little at this, but she was too much in awe of the Queen to disbelieve **it**.

[女王様は言いました]「何を言うか考えるときはお辞儀をするのよ。そうすると時間が節約できます」アリスは本当かしらと少し思いましたが、女王様をととても恐れていたおっしやることを信じない訳にはいきませんでした。

一つ目の it は curtesy(ing) while you're thinking what to say を指す拡大指示で、二つ目の it は(that) curtesy(ing) while you're thinking what to say saves time を指すテキスト指示だとされている。

Himmelmann によると、指示詞の中でこの用法がいちばん多いという。

... it is noteworthy that discourse deictic use is the single most frequent among the pronominal uses . Furthermore, the use of a pronoun for discourse deixis in general tends to be more frequent than the use of an adnominal construction for this purpose. Thus, it may be hypothesized that discourse deixis is *the* typical use for demonstrative pronouns...

(Himmelmann 1996 : 225)

注目すべきは、談話指示用法が指示代名詞の用法の中で最も頻度が高いということである。おまけに談話指示用法の代名詞は同じ用法の形容詞よりもよく用いられる傾向がある。したがって指示「代名詞」の典型的用法は談話指示であるという仮説を立てることができるだろう。

#### (4) Tracking use 前方照応 (文脈指示)

文脈指示の前方照応である。(3) の談話指示とのちがいは、はっきりと特定できる名詞句を先行詞とするという点にある。指示詞のこの用法で問題となるのは、前方照応の手段としての人称代名詞 (il / elle) 、定冠詞付き名詞句 (le N)、指示詞付き名詞句 (ce N) の使い分けである。

a. Il était une fois un prince qui avait un grand château. {Il / Le prince / Ce prince}...

昔々ある所に、大きなお城を持っている王子様がおりました。{彼 / 王子様 / この王子様} は...

この使い分けをめぐるはいくつかの説が提案されている。

#### ① 主題性 (topicality) / アクセスのしやすさ (accessibility) による説明

##### Accessibility Marking Scale

Low Accessibility アクセスしにくい

Full name + modifier フルネーム + 修飾語句 ex. the President Barack Obama

Full name フルネーム ex. Barack Obama

Long definite description 長い定名詞句 ex. the president of the United States

Short definite description 短い定名詞句 ex. the president

Last name 名字 ex. Brown

First name 名前 ex. Mary

Distal demonstrative + modifier 遠称の指示詞 + 修飾語句 ex. that of Peter

Proximal demonstrative + modifier 近称の指示詞 + 修飾語句 ex. this of Mary

Distal demonstrative (+NP) 遠称の指示詞(+名詞句) ex. that (house)

Proximal demonstrative (+NP) 近称の指示詞(+名詞句) ex. this (house)

Stressed pronoun + gesture 強勢形代名詞 + 身振り

ex. (人を指して) Him.

Stressed pronoun 強勢形代名詞 ex. Him.

Unstressed pronoun 無強勢代名詞 ex. He is ...

Cliticized pronoun 接辞代名詞 ex. Je le sais.

High Accessibility アクセスしやすい

(Ariel, Mira, *Assessing Noun-Phrase antecedents*, Routledge, 1990 : 73)

これによれば、アクセスしやすさの順序は le N < ce N < il / elle となる。

② 同類の他の指示対象との対比説 (Corblin)や、注意の焦点に置き卓立性を高めるなどの説もある。段落などの談話の内部構造を考慮するテキスト言語学に多い。

③ 分析哲学者 Kaplan の *circonstances d'évaluation*「値踏み場」と *context d'énonciation*「発話文脈」による説明 (Kleiber)。この問題については小田涼 (2008)「定名詞句 *le N* と指示形容詞句 *ce N* による照応のメカニズム」『フランス語学研究』42.が詳しい。

英語やフランス語のように指示詞以外に定冠詞を持つ言語では、*un N* を直後に *le N* で受けることに抵抗があり、*ce N* が好まれるとされている。

But in languages such as English where a definite article exists, there is as well “a certain aversion to the use of *the*-form immediately after the word is introduced; a demonstrative is more usual in such cases” (Christophersen 1939 : 29). Hence, it is more common to find sequences such as *Once upon a time there was a king. This king had...* instead of *The king had...* As Lichtenberk (this volume) points out, this strategy is generally used only in those instances where the new participant is “thematically prominent, either globally or locally”.

(Himmelman, *op. cit.* p. 229)

しかし英語のように定冠詞のある言語では、「語が導入されたすぐ後で *the* を使うことにある種の抵抗もあり、このような場合には指示詞が用いられる」(Christophersen 1939 : 29) とされている。したがって「昔々ある所に王様がおりました。王様には…」よりも「その王様には…」となる方が普通である。リヒテンベルク (本書) が指摘しているように、この手段は新しい登場人物が「物語全体を通して、もしくはその一部でテーマ的に重要」である場合に限られる。cf. Christophersen, Paul, *The Articles. A Study of their Theory and Use in English*, Munksgaard, 1939.

#### (5) Recognitional use 記憶指示

Himmelman の研究で最も注目されるのは、記憶指示を指示詞の普遍的に見られる用法としたことである。Himmelman が言うように、今までの指示詞の研究では記憶指示はあまり取り上げられてこなかった。

The fourth, called *recognitional use* in this paper, has until now received little attention despite the fact that it is a fairly prominent use for one (usually the distal) demonstrative in each of the languages under investigation. This use is characterized by the fact that the intended referent has to be identified via specific, but presumably shared, knowledge.

(Himmelman, *op. cit.* p. 206-7)

本書で記憶指示と呼ぶ4番目の用法は、ここで考察の対象とする言語では指示詞のひとつ (ふつうは遠称) が担う極めて重要な用法であるにもかかわらず、今まであまり注目されて来なかった。この用法の特徴は、意図する指示対象の同定が特定の個人のものでありつつも、多分に共有されている知識の中で行われるという点にある。

次の例は *The Pear Stories* からのものである。

XII.15. it was filmed in California, *those dusty kind of hills that they have out here by Stockton and all,*

この物語はカリフォルニアのストックトンあたりによくある (あの) 埃っぽい丘陵地帯で撮影されたものです

Himmelman はこの用法の特徴を次のようにまとめている。

① you know ? 「ほら」、remember ? 「覚えてる？」など呼び水表現を伴うことが多い。



② どちらかと言えば主題性が低く、談話においてあまり重要ではない指示対象を指すのに用いられる。その指示対象は後続談話においてさらに話題になることがない。

③ 関係節などの修飾節を伴うことが多い。(以下フランス語の例は東郷が追加)

Il y avait sur la cheminée, entre les candélabres, deux de *ces grandes coquilles roses* où l'on entend le bruit de la mer quand on les applique à son oreille.

(Flaubert, *Madame Bovary*)

暖炉の上の燭台の間には、耳に押し当てると海の潮騒の音が聞こえるという(あの)大きな桃色の貝がふたつ置かれていた。

④ 前方照応の *ce N* と異なり、記憶指示の *ce N* は先行詞なしで初出に用いられる。

Tu te souviens de *ce prof de maths* qui mettait des bonnes notes à toutes les copies ?

(Sartre, *La Nausée*, cité dans Gary-Prieur 1998)

ほら、全部の答案にいい点数を付けたあの数学の先生を覚えているかい。

⑤ 記憶指示の典型的な用例は名前が思い出せないときである。

one of them came back, and this one's playing with one of those *those wooden things* that you hit with a ball. (*The Pear Stories*)

そのうちの一人が戻って来て、その子は、ほらあの木でできていて、ボールをポンポン打つやつで遊んでいる。

⑥ 指示詞の記憶指示用法で用いられる共有知識の種類

First, let us clarify the kind of shared knowledge characteristic of recognitional use which distinguishes it from other referential mentions based on shared knowledge. Ward (1983 : 113), discussing the unstressed *that* in English, relates this use to the familiarity principle well-known from the research on definite articles (cf. Christophersen 1939; Hawkins 1978; Prince 1918). However, demonstratives may not occur in two of the typical familiar uses of the definite article, i.e. the larger situation and the associative-anaphoric use. That is, the kind of familiarity (or shared knowledge) involved in recognitional use of demonstratives must be somewhat different from the one involved in these familiar uses of the definite article. The difference pertains to the fact the kind of knowledge involved in the familiar uses of the definite article is considered to be generally shared among the members of a given speech community. It does not involve a specific interactional history common to the communicating parties in a given communicative event. Recognitional use of demonstratives, on the other hand, draws on specific, 'personalized' knowledge that is assumed to be shared by the communicating parties due to a common interactional history of to supposedly shared experiences. (Himmelman, *op. cit.* p. 233)

まず記憶指示用法の指示詞に特徴的な共有知識と、同じく共有知識に依存する他の指示表現とのちがいを明らかにしておこう。Ward (1983 : 113) は、英語の無強勢の *that* を論じて、[そのはたらきを] 定冠詞の研究 (cf. Christophersen 1939; Hawkins 1978; Prince 1918) でよく知られている既知性の原理と結びつけている。しかしながら、指示詞には既知性に基づく典型的な用法のうちふたつが欠けている。それは広い状況指示と連想照応である。つまり指示詞の記憶指示用法で用いられる既知性(もしくは共有知識)は、このふたつの用法で定冠詞が依拠する既知性と異なっていることになる。定冠詞の既知性を支える共有知識は、通常ある言語共同体の成員全員に共有されていると見なされる。その共有知識は、特定のコミュニケーション事例の当事者だけが持っている特定の相互的やり取りの歴史を含まない。これに対し

て指示詞の記憶指示用法は、特定の「個人的な」知識に基づいており、その知識はコミュニケーションの当事者が共有していて、両者の間の相互的なやり取りや共に経験したことなどに由来しているのである。

### 【解説】

定冠詞を用いて対象を指す場合にも既知性が関係すると言われている。

定性とはこういった概念なのかということを示そうとすると、1つの方法として、これを既知性 (knownness) の問題と結びつけて説明することが可能かもしれませんが。既知性というのは、話者と聞き手とが共有している知識を参照枠とした上で、問題の名詞が表している対象を聞き手はすでに知っているにちがいないと話者が判断しているかどうかを表す概念のことです。(…) この既知性という概念と定冠詞 *the* の使用の間には、非常に密接な関係が存在しているという点は、次の文からもはっきりとわかります。

(1) Did you know that you have *\*the mud / mud* on your coat?

あなたのコートに泥がついているのを知っていましたか。

(石田秀雄『わかりやすい英語冠詞講義』大修館書店、2002)

既知性のがどこから来るかは定冠詞の用法によって異なる。

(A) 現場指示用法では発話の場にあるから既知である。

a. Ferme *la* porte. ドアを閉めて。

(B) 文脈指示では先行文脈にあるので既知である。

b. Elle a acheté des poires et des tomates. *Les* poires étaient bien mûres.

彼女は洋梨とトマトを買った。洋梨はよく熟していた。

(C) 共有知識用法ではみんなが知っているのが既知である。

c. [総称] *Les* castors construisent des barrages.

ビーバーはダムを作る。

d. [唯一物] Cette nuit, *la* lune est le plus proche de *la* Terre.

今夜は月が地球にいちばん近い。

e. [特定の町、国、地方でひとつしかないのが既知である]

*Le* président démissionnera bientôt.

大統領は間もなく辞任するだろう。

→ これが Hawkins の larger situation use 「広い状況指示」

f. [連想照応]

Il y a une maison. *Le* toit est bleu.

家が一軒ある。屋根はブルーだ。

→ 「家」には「屋根」があることは誰でも知っている。

このうち指示詞にも(A)と(B)の用法はある。

(A) 現場指示

Regarde *cette* porte. このドアを見て。

(B) 文脈指示

Nous avons trouvé une autre cabane dans le bois. *Cette* cabane était déserte.

私たちは森の中でもうひとつ小屋を見つけた。その小屋は無人だった。  
ところが(C)の用法の一部は指示詞にはない。

a. \**Cette nuit, cette lune est le plus proche de cette Terre.*

今夜はこの月はこの地球からいちばん近い。

b. # *Ce président démissionnera bientôt.*

この大統領は間もなく辞任するだろう。

**N.B.** 他の大統領との対比がなければ使えない。

c. *Il y a une maison. \*Ce toit est bleu.*

家が一軒ある。その屋根はブルーだ。

a. と b. が Himmelmann の引用にある larger situation use 「広い状況指示」で、c. が連想照応である。

Himmelmann は定冠詞の共有知識用法を支えている知識は、人類全体あるいはある国や町などの共同体の成員全員に共有されているとする。la lune では月がひとつしかないことは誰でも知っている。le président は共和国に一人しかいない。また家に屋根があることも常識の一部である。

一方、指示詞の記憶指示用法で用いられる知識は、話し手と聞き手が共通して体験したことに基づく個人的エピソード記憶だと Himmelmann は考えている。

フランス語でも次の例にはこれが当てはまる。

d. Tu te souviens de *ce prof de maths* qui mettait des bonnes notes à toutes les copies ?

(Sartre, *La Nausée*, cité dans Gary-Prieur 1998)

ほら、全部の答案にいい点数を付けたあの数学の先生を君は覚えているかい。

しかし周知の指示形容詞と呼ばれている次の例には Himmelmann の言うことは当てはまらない。ces grandes coquilles roses 「あの大きな桃色の貝殻」は誰でも知っていると思われているものを指すからである。従って Himmelmann の提案する一般化はいささか単純すぎると考えられる。

e. Il y avait sur la cheminée, entre les candélabres, deux de *ces grandes coquilles roses* où l'on entend le bruit de la mer quand on les applique à son oreille.

(Flaubert, *Madame Bovary*)

暖炉の上の燭台の間には、耳に押し当てると海の潮騒の音が聞こえるという (あの) 大きな桃色の貝殻がふたつ置かれていた。

## 7. 問題となる指示詞の用法

(1) 指示形容詞の用法としては、伝統的には現場指示用法と文脈指示用法が中心と考えられており、次のような用法は周辺的なものと見なされてきた。

L'adjectif démonstratif est un **présentatif** ; il sert à actualiser, à mettre devant les yeux une personne ou une chose dont on n'a pas encore parlé ; il s'emploie absolument.

*Ces jardins, cette eau verte et rose, ce doux soleil sur les murettes de pierres, c'était comme un printemps soudain, comme un sourire charmant de la terre et de la saison qui fût venu à leur rencontre. (M. Genevoix)*

(Wagner, R.L. & J. Pinchon, *Grammaire du français classique et moderne*, Hachette,

1962)

指示形容詞は提示詞である。指示形容詞はそれまで話題になっていない人や物を現働化し、目の前に提示する。指示形容詞は先行詞なしで用いることがある。

この庭、緑と薔薇色に染まったこの水、小さな石壁に射すこの柔らかい日差し、それはまるで突然訪れた春のようだった。まるで彼らに会うために大地と季節が優しく微笑みかけたかのようだった。

上の例の *ces jardins, cette eau verte et rose, ce doux soleil sur les murettes de pierres* は現場指示ではなく、先行詞なしで使われているので文脈指示でもない。伝統文法では説明がつかない用法である。

(2) しばらく前から現場指示でも文脈指示でもない指示詞の用法を大きく取り上げる研究が増えてきた。たとえば Kleiber は次のような用法が問題となっている。

a) 聞き手（読み手）との知識の共有を前提としない記憶指示

i) Ah la Grèce, *cette* mer, *ces* îles ! (Wilmet 1986)

ああ、ギリシア、あの海、あの島々！

ii) Voici que se dresse dans mon souvenir, brusquement, *ce* vieux mur croulant et chargé de lierre. (Saint-Exupéry, *Courrier sud*)

突然私の記憶の中に、崩れかけて蔦に被われたその壁が立ち上がる。

b) 周知の指示形容詞

Léon était las d'aimer sans résultat ; et puis il commençait à sentir *cet* accablement que vous cause la répétition de la même vie, lorsqu'aucun intérêt ne la dirige et qu'aucune espérance ne la soutient. (Flaubert, *Madame Bovary*)

レオンは報われない愛に疲れていた。そして彼は、どんな利益も期待できず、希望の光も射さない単調な生活の繰り返しに人が感じるあの倦怠を覚え始めていた。

c) 特定の聞き手の記憶に訴える記憶指示

Tu te souviens de *ce* prof de maths qui mettait des bonnes notes à toutes les copies ? Comment donc était-il, *ce* montagnard qui nous fit peur dans une ruelle ?

全部の答案にいい点数を付けたあの数学の先生を君は覚えているかい。そして小道で僕たちを恐がらせたあの田舎者はどんな風体だったかな。 (Sartre, *La Nausée*)

d) 新聞記事などの標題の指示形容詞

*Ces* mensonges d'état qui ont fait tant de mal à la république.

共和国に大きな害悪をなした国家の嘘

e) emplois narratif « observationnel » (De Mulder) 語りで視点を表す用法

Quoiqu'il vît clair en les hommes, il ne savait pas, pour autant, se défendre contre leurs entreprises, c'est pourquoi il écoutait avec un sourire d'ange *ce* notaire qui l'emperlificotait dans des comptes d'hommes de loi. Que disait-il, *ce* notaire ? Il parlait de la guerre précisément. (P. Magnan, *La Maison assassinée*)

人間とは何かを心得てはいたものの、彼は策謀から身を守る術を知らなかった。そのために、法律談義を繰り広げて彼を煙に巻こうとするこの公証人の話に天使のような微笑みを浮かべて耳を傾けていたのである。何と云っていたっけ、この公証人は。そうだ、戦争の話をしていたので。

f) 自由間接話法に現れる指示詞

Il examine une dernière fois sa future récolte avant de rentrer au village. Vendu un bon prix, **ce** coton devrait lui permettre d'acheter le mil qui manquera.

村に帰る前にもう一度彼は見込める収穫高を見積もる。この綿がよい値で売れたら不足しているトウジンビエを買うことができるだろう。

g) 小説の冒頭などに現れる insolite 「風変わりな」、insolent 「厚かましい」 指示詞  
M. Lantin ayant rencontré **cette** jeune fille, dans une soirée, chez son sous-chef de bureau, l'amour l'enveloppa comme un filet.

ランタン氏は、会社の部下の家で催されたパーティーでその若い女性に出会うと、まるで網にかかったように恋に落ちた。

(Kleiber, G. « Adjectifs démonstratifs et point de vue », *Cahiers de praxématique* 41, 2003)

(3) このような指示詞の用法を理解するためには、日本語の指示詞コ・ソ・アについての知見が役に立つ。日本語の指示詞の用法を概観しておく。

a) 現場指示用法（直示用法）

現場指示用法では、身振りなどを伴いコ・ソ・アのすべてが用いられる。コは近称、ソは中称、アは遠称で、話し手からの距離によって使い分ける（距離原理）。それ以外にソは聞き手領域を指す（人称原理）

i) [何かを差し出して] **これ**、見てください。

ii) [相手の着ている服を指して] **その**セーター、彼女の手編み？

iii) [離れた所にある木を指して] **あの**木の所まで競走しよう。

b) 文脈指示用法

文脈指示ではコとソを用い、アは用いない。

i) 前方照応ではふつうソを用いる。

林の中の開けた場所に一軒の家があった。**その**家はスイス風のコテージのような外観をしていた。

ii) 後方照応ではコを用いる。

**この**ことは内緒にしてほしいんですけど、私、来月退社する予定なんです。

iii) 直前の語の言い換えや、話し手が情報を占有しているときにはコを用いる。

i) 生命、{この / \*その} 神秘

ii) [TV のニュースで] 昨夜、京都市左京区で民家が焼ける火事がありました。

{この / ?その / \*あの} 火事で二人が軽い火傷を負いました。

c) 記憶指示用法（観念指示用法）

記憶指示用法にはアのみが用いられる。誰でも知っているものを指すのが典型的である。

i) これが {**あの** / **かの**} 有名なロゼッタ・ストーンですよ。

ii) **あの**ニュートンでさえ解けなかった問題です。

iii) 今年も阪神は**アレ**を目差します。

話し手と聞き手の個人的な共通経験に基づく用法もある。

iv) A: ほら、先月行った**あの**ピエモンテ料理の店、美味しかったね。

B: ええ、**あの**店のアニョロッティは絶品でしたね。

必ずしも聞き手が共有していない指示対象を指すこともある。

- v) お前達が発って行ったのち、日ごと日ごとずっと私の胸をしめつけてみた、  
**あの**悲しみに似たような幸福の雰囲気を、私はいまだにはつきりと蘇らせる  
ことが出来る。(堀辰雄『風立ちぬ』)

(4) 日本語の指示詞の用法に照らしてみると、Kleiber の挙げた問題となる指示詞の用法は次のように理解することができる。

a) 聞き手（読み手）との知識の共有を前提としない記憶指示

i) *Ah la Grèce, cette mer, ces îles !* (Wilmet 1986)

ああ、ギリシア、あの海、あの島々！

日本語ではア系指示詞は、話し手と聞き手が共有する記憶を指すのが原則だが、話し手のみが保持する記憶を指す用法も観察される。

親鸞 九つの時に初めて登山して、二十九の時に法然様に遇ふまでは大てい彼の山で修行したのです。

唯圓 その頃の事が思はれませうね。

親鸞 **あの**頃の事は忘れられないね。若々しい精進と憧憬との間にまじめに一すぢに煩悶したのだからな。(倉田百三『出家とその弟子』)

このような用法では、聞き手を置き去りにして、話し手が一人で感慨に耽っているような効果が認められる。

(4) b) 周知の指示形容詞

*Nous nous détournerions de nous comme de ces personnes avec qui on a été liés mais qu'on n'a pas vues depuis longtemps.* (Proust)

以前は親しかったが長いこと会っていない人たちから心が離れていくように、私たちは自分自身から目を背ける場所だった。

この用法は「あのナポレオン」のようなア系指示詞の記憶指示用法と同じものである。ただし、次の点に注意が必要である。

(I) フランス語の周知の指示形容詞には関係節が必要だが、日本語では必要でない。

i) *J'aime ces longs cigares que fume Clint Eastwood dans les westerns spaghetti.*

私はクリント・イーストウッドがマカロニウェスタンの中で吸っているあの長い葉巻が好きだ。

ii) *\*J'aime ces longs cigares.*

私はあの長い葉巻が好きだ。(現場指示ならば OK)

例 i) のような周知の指示形容詞のメカニズムと、それに関わる関係節の働きについて Kleiber は次のように述べている。

Le processus référentiel accompli dans les deux SN démonstratifs est l'introduction d'un nouveau référent dans la mémoire immédiate ou active ou encore *modèle contextuel* ou *modèle discursif*, mémoire commune au locuteur et à l'interlocuteur au moment de l'énonciation du SN démonstratif. Ce référent nouveau ne l'est pas totalement, mais est supposé (ou supposé pouvoir être) déjà disponible dans la mémoire longue. Il se trouve réactivé ou réintroduit dans la mémoire immédiate discursive *via* l'expression d'une proposition portant sur ce référent, proposition supposée également faire partie du stock des propositions déjà acquises dans l'*univers de croyance* (Martin, 1987) de l'interlocuteur. C'est la relative qui joue ce rôle de transition et qui représente l'élément intermédiaire en

relation spatio-temporelle avec l'occurrence du démonstratif : elle opère la sortie de la mémoire discursive et, parce que son contenu est supposé être déjà connu, donne accès au référent présent dans la mémoire longue.

(Kleiber, G. « Enonciation et texte : grammaire des démonstratifs “titres” », *Cahiers de praxématique* 55, 2011)

指示詞の付いた二つの名詞句が行なう指示のプロセスでは、その時点で活性化されている当座の記憶の中に新しい指示対象が導入される。この記憶は「文脈モデル」とも「談話モデル」とも呼びうるものである。それは指示形容詞句が発話された時点において、話し手と聞き手が共有している記憶を指す。この新しい指示対象はまったく新しいという訳ではない。それは「話し手と聞き手が共有する」長期記憶の中にすでにあると見なされる（または見なされうる）ものである。その対象は、それにかかる関係節のはたらきによって、再活性化されたり当座の談話記憶の中に再導入される。この関係節もまた、聞き手の「信念の世界」(Martin, 1987)の中にすでに存在していると見なされる命題のストックの一部である。この橋渡しをするのが関係節であり、文中の指示詞との時空間上の仲介を担当する要素である。関係節は当座の談話記憶からの離脱を実現する。その意味内容は既知と見なされているので、長期記憶に貯蔵された指示対象へのアクセスを可能にするのである。

#### 【解説】

言葉によるコミュニケーションは、話し手と聞き手の間での前提集合の更新とみなすことができる。「前提」とは、話し手と聞き手が共有している情報のかたまりをさす。「柴田君、フランスに留学するらしいよ」という文の内容は、話し手は知っているが、聞き手はまだ知らない（と話し手が判断している）情報である。話し手はこの発話によって聞き手の前提集合をアップデートする。この前提集合を上での引用では *mémoire immédiate* 「当座の記憶」、*modèle contextuel* 「文脈モデル」、*modèle discursif* 「談話モデル」などと呼んでいる。

J'aime *ces* longs cigares que fume Clint Eastwood dans les westerns spaghetti. の例では、*ces* longs cigares... は、話し手が新たに談話に持ち出した話題ではあるが、聞き手もかねてから知っている（長期記憶の保存されている）ものと見なされている。これが「周知」と呼ばれる所以である。

Kleiber の主張で重要な点は関係節の働きである。もし関係節を次のように変えたら *ces* に周知の意味はなくなる。（例は東郷の作例）

i) J'aime *ces* longs cigares qui sont rangés précieusement dans la boîte laquée de mon grand-père.

私は祖父の漆塗りの箱に大切に並べられている長い葉巻が好きだ。

その理由は、主節の J'aime *ces* longs cigares と、関係節の *qui sont rangés...*以下が同じ世界（現実）に属しているからである。これでは現場指示の意味しかなくなる。周知の意味を得るためには、関係節によって別の世界に跳ばなくてはならない。これが引用中の *ce rôle de transition* 「この橋渡しの役目」、*la sortie de la mémoire discursive* 「当座の談話記憶からの離脱」と表現されているものである。関係節が表す別の世界とは、誰でも知っているとみなされる百科事典的知識やエピソード記憶の世界である。

(5) c) 特定の聞き手の記憶に訴える記憶指示

a. Tu te souviens, *ces* pelotons de laine de toutes les couleurs, et c'était toi qui tenais

l'écheveau.

(C.-F. Ramuz, *Aimé Pache - Peintre vaudois*)

覚えているかい。あのいろんな色の毛糸の玉を。そして栴（かせ）を持つのはいつもお前だったね。

これは「ほら、いつも和服を着ていたあの国語の先生、覚えてる？」のような日本語の典型的な記憶指示用法であり、同じように理解できる。この用法は最近のフランス語学では *démonstratif mémoriel* 「記憶指示の指示詞」と呼ばれる。そのメカニズムは次のように説明される。

- b. En employant le démonstratif « mémoriel », le locuteur peut signaler à l'allocataire que le contenu descriptif du SN ne suffit pas à repérer univoquement le référent et il l'invite à mobiliser d'autres connaissances. C'est dans cette perspective que l'on peut comprendre l'occurrence fréquente des incises comme *tu sais, tu te souviens, dont je j'ai parlé* etc. activant la mémoire.

(De Mulder, W. & A. Carlier « Du démonstratif à l'article défini : le cas de *ce* en français moderne », *Langue française* 152, 2006)

記憶指示の指示詞を用いることで、話し手は名詞句の意味内容だけでは指示対象にうまく辿り着けないと聞き手に伝えることができ、聞き手に別の知識を動員するよう要請するのである。このように考えることで、「ほら」「覚えてる？」「前に話した」のように、聞き手の記憶を喚起するような挿入句が頻繁に用いられることが理解できる。

また De Mulder & Carlier は、記憶指示で用いられるのが常に遠称の指示詞であることを次のように正しく説明しており、それが指示詞から定冠詞への歴史的変化の要因だとしている。

- c. Par ailleurs, dans cette perspective typologique, il est possible d'expliquer dans le cadre de cette hypothèse, pourquoi c'est d'habitude le démonstratif de distance qui tend à s'engager dans cette voie de grammaticalisation. Comme il a été démontré pour l'allemand par Vuillaume (1989) et pour l'ancien français par Kleiber (1987a), dans le cas d'une opposition entre un ou des démonstratif(s) de proximité et un démonstratif de distance, le(s) démonstratif(s) de proximité marque(nt) que les informations disponibles dans le contexte immédiat de son occurrence — énonciatif ou textuel — suffisent pour identifier le référent, alors que le démonstratif de distance suggère que d'autres informations que celles disponibles dans le contexte immédiat de son occurrence contribuent au repérage du référent. L'emploi du démonstratif de distance incite ainsi l'allocataire à activer dans sa mémoire des connaissances préalables contribuant au repérage du référent, ce qui le prédispose naturellement à évoluer, par le biais d'un emploi mémoriel, dans le sens de la définitude sémantique.

(De Mulder & Carlier, *op. cit.* : 109)

おまけにこのような類型論的視点に立つと、[指示詞から定冠詞への歴史的変化という] 文法化の過程をたどるのがなぜふつうは遠称の指示詞なのかということはこの仮説の枠組みで説明できる。ドイツ語について Vuillaume (1989)が、古フランス語について Kleiber (1987a) が示したように、近称の指示詞と遠称の指示詞が対立するとき、近称の指示詞は指示対象を見つけるのにすぐ近くの文脈 - 発話の場であれ、先行文脈であれ - にある情報だけで足りることを示し、遠称の指示詞はすぐ近くの文脈で見つかるもの以外の情報が指示対象を見つけるのに必要であることを示す。このように遠称の指示詞は、指示対象に辿り着くために必要な前もって保持している知識を記憶の中



から呼び出すように話し手にうながす。このため遠称の指示詞は、記憶指示用法を媒介として、[定冠詞の持つ] 意味的な定性の方向に歴史的に変化する素因をもともと持っているのである。

(6) e) *emplois narratif « observationnel »* (De Mulder) 語りで視点を表す用法 / f) 自由間接話法に現れる指示詞

a) Ridicule ! C'est là, paraît-il, dans *ce* jardin public, au bout de la spirale de troènes taillés, qui coiffe la butte, c'est là sur *ce* banc de ciment imitation bois, terminus apprécié des petits jeunes gens amateurs d'ambulations tendres, c'est là que je fus touché par la grâce et que de mes yeux les écailles tombèrent. (Hervé Bazin *Le Matrimoine*)

馬鹿げている。それはどうやらこの公園で起きたことらしい。小高い丘のてっぺんにある刈り込まれたイボタの木が螺旋状になっているその端で。それは軽い遠足を好む子供たちに人気のゴールとなっている木製を模したセメントのベンチで起きた。私はそこで神の恩寵に打たれ、私の目から鱗が落ちたというのだ。

この二つは同種の用法と見なすことができる。どちらの用法にも「直示中心の移動」(deictic center shift) に伴う「視点の移動」が関係していると考えられる。

語りにおける直示中心の移動と、それに伴う視点の移動がどのように起きるのかについての Kleiber のまとめを見てみよう。(ただし Kleiber はこの説に反対)

b) Le point de départ est constitué par une conception égocentrique ou logocentrique des expressions déictiques qui pose le locuteur (et l'interlocuteur) comme centre de la deixis ou *Origo* bühlérien, à partir duquel s'organise la situation d'énonciation et se déterminent les différentes composantes, spatiale, temporelle, personnelle, etc., de cette situation. Il peut y avoir transfert ou déplacement de cette situation d'énonciation et donc changement d'*Origo* et emploi décalé des expressions déictiques. (...) Dans un tel cadre, l'adjectif démonstratif, comme le souligne Janasson (2002 : 112), « indique toujours que le référent du SN qu'il introduit est présent, d'une manière ou d'une autre, dans la situation de son énonciation ou, si vous voulez, est focalisé à partir d'un centre déictique. (...) »

(Kleiber, G. « Adjectifs démonstratifs et point de vue », *Cahiers de praxématique* 41, 2003)

出発点は直示表現を自己中心的もしくは発話者中心的に捉える考え方である。この考え方では、話し手(と聞き手)[のいる場所と時間]を直示中心とみなす。これはかつてビューラーが *Origo* と呼んだものである。この直示中心を原点として発話の場が構成され、その場を形作る空間・時間・人称といったさまざまな構成要素が決定される。この発話の場は場所や時間をずらされて移動することがある。すると *Origo* もまた変化し、直示表現は元とはずれたものとなる。(…) この考え方では、Janasson (2002 : 112)が指摘するように、「指示形容詞が導入する指示対象は、どんな形であれ話し手のいる発話の場に存在することを表す。言い換えれば、その指示対象は直示中心を原点として焦点化されるのである。」続けて Kleiber は Janasson の次の一節を引用している。

c) Si, dans l'usage d'une conversation ordinaire, la référence de ces termes [=les termes déictiques en général] est résolue à partir du *hic et nunc* de la situation de leur énonciation, que le linguiste allemand Karl Bühler (1934) appelait *Origo* et qu'on peut aussi appeler *centre déictique*, l'un des traits les plus typiques du discours narratif est le déplacement de ce point de référence. En effet, le déplacement et la mobilité du centre déictique permet à un auteur d'établir différents points de vue ou différentes perspectives, créant ainsi la

polyphonie si caractéristique des textes fictifs narratifs. Le centre déictique n'est alors plus le lieu et le moment où l'auteur écrit ou ceux où le destinataire est en train de lire, mais se trouve déplacé à l'intérieur de l'histoire racontée. En déplaçant ainsi le centre déictique, l'auteur peut adopter soit le point de vue subjectif d'un des personnages fictifs, soit celui, subjectif ou objectif, d'un narrateur plus ou moins présent ou anonyme dans le récit. En adoptant la perspective d'un personnage fictif, il nous met dans la peau de celui-ci et nous fait vivre les événements de l'histoire comme si nous y prenions part réellement.

(Jonasson, K. « Références déictiques dans un texte narratif. Comparaison entre le français et le suédois », Kesik, M. (ed) *Références discursives dans les langues romanes et slaves*, Wydawnictwo Uniwersytetu Marii Curie-Skłodowskiej, 2002)

日常の会話で用いられる直示表現が何を指すかは、その指示表現が発話されたその時の状況の「今、ここ」を原点として決められる。この「今、ここ」はドイツの言語学者カール・ビューラーが *Origo* と呼んだもので、直示中心とも言い換えることができる。一方、[小説などの] 語りで典型的に見られるのは、この直示中心が移動することである。直示の中心を動かすことができ、またそれをどこにでも設定することができるので、物語の作者は語りの中でさまざまな視点を作り出すことができる。それによってフィクションの語りのテキストに特徴的なポリフォニー（声の重層性）を生み出すことが可能となる。物語の中の直示中心は、作者がその物語を書いている場所・時間でも、読者が読んでいる場所・時間でもない。語られた物語の中へと移動しているのである。このように直示中心を動かすことで、作者は虚構の登場人物の主観的な視点を取ったり、物語の中に見え隠れしたり、完全に姿を隠していたりする語り手の視点を取ることもできる。その視点は主観的なことも客観的なこともある。登場人物の視点を取ることによって、物語を読む私たちはまるでその人物になったかのように感じる。そしてまるでほんとうに私たち自身がその物語に参加しているかのように、語られる出来事を追体験するのである。

続けて Kleiber は次のように述べている。

d) Dans la séquence :

Il restait là, bras ballants, au centre de l'espace, observant fixement à ses pieds *cette* nappe de poussière grise qui masquait les dalles.

le démonstratif marque, selon Jonasson, que la perspective adoptée est celle du personnage (*il*) et non plus celle du narrateur, la présence d'un verbe de perception (*observant fixement*) constituant un indice en faveur de cette interprétation. (Kleiber, *op. cit.*)

次の一節において

彼はその場所の真ん中に両腕をだらりと垂らしたまま佇んでいた。足下に広がり床のタイルを被っているこの灰色の埃の層をじっと見つめながら。

Jonasson によれば指示詞は、語り手の視点ではなく、*il* と呼ばれている登場人物の視点が取られていることを表している。「じっと見つめながら」という知覚動詞があることがその証拠だとしている。

《参考文献》物語における直示中心の移動については英語だが次の文献が詳しい。

Duchan, J. F. et als. (eds) *Deixis in Narrative. A Cognitive Science Perspective*, Lawrence Erlbaum Associates, INC., 1995.

(7) 小説などの語りのテキストにおいて、登場人物の視点から用いられる指示詞は日本語学では以前から知られていた。吉本はこれを「感情移入」という概念を用いて説明しようとしている。

22. うとうとして眼が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めている。

この爺さんは慥かに前の前の駅から乗った田舎者である。発車間際に頓狂な声を出して、馳せ込んで来て、(…)

(夏目漱石『三四郎』)

上の例の「コノ爺さん」を「感情移入」の概念を用いて説明する。ここで感情移入とは、テキスト中で語られる想像上の世界のある人物を話し手(書き手)が自分と同一視することであり、聞き手(読み手)もまたこれと自分を同一視することになる。(…) 例文 22 において、書き手が主人公の三四郎に強く感情移入していることが、目覚めて事物を発見するという心的表現や第 3 文の「爺サン」を主語として三四郎の個人空間に関わる補助動詞「テクル」に表れている。「コノ爺さん」も同様の表現である。それは「爺サン」が三四郎の近くに位置することを意味しているが、同時に「コノ」がその意味で用いられるためには三四郎が空間的・時間的な座標の原点として機能しなければならない。これが話し手・聞き手から三四郎に移るためには三四郎への話し手・聞き手からの強い感情移入が必要である。こうして三四郎に置かれた原点に想像上とはいえ依存した表現が行われるという点では、この文脈指示用法としてのコは本質的に現場指示と何ら変わらない。

(吉本啓「日本語の指示詞コソアの体系」金水敏・田窪行則編『指示詞』ひつじ書房、1992) **N.B.** この論文は吉本の“On demonstratives KO/SO/A in Japanese”『言語研究』90, 1986 (日本言語学会) を日本語で書き直したものである。

(8) 金水・田窪はこの用法を「視点遊離のコ」と呼んでいる。

第二の用法は「視点遊離のコ」と呼んでおく。これは、小説や体験談など、時間の経過とともに出来事が推移していくような文章にのみ現れるもので、このような文章では、現場や聞き手などに影響されることなく、話し手の視点を自由に話中の登場人物に近付けることができる。つまり、話の登場人物の目からみて近いと感じられるものをコで指し示すのである。したがって、現場指示の拡張と見てよい。また、このコを含む文は、自由間接話法に属すると考えられる。次の例を見られたい。

(52) [三四郎の例なので省略]

(53) 鏡史郎は書庫の空気を入れ替えると、これも毎日のことであるが、書棚をぐるりと見廻して、ここでも異変があるかどうか確かめる。(「夜の声」)

(金水敏、田窪行則「談話管理理論からみた日本語の指示詞」、『認知科学の発展』vol 3、日本認知学会、講談社、1990)

(9) 直示原点の移動 (deictic center shift) によって指示の原点がずれるのは、近称のコ系指示詞のみと考えられているが、ほんとうにそうだろうか。次の例を見てみよう。

a) 夕方まで、彼 [=主人公の田中] はさきほどと同じように枕に横顔をあててじっとしていた。暮れなずむ窓の遠くから車やバスの走るかすかな音がする。眼をつぶりそれを聞きながら、今、自分は巴里ではなく、日本の家にいるのだと思おうとしたが無駄だった。ここはたしかに巴里に違いなかった。そして自分はこの病院の中で一人ぼっちで寝ていた。今ごろ、あのブル・ミッシュ通りではキャフェの灯が滲み、テラスでストーブにあたりながら騒いでいるだろう。今、あのアムラン町のホテルの自分の部屋はどうやって居るだろう。管理人は荷物をすっかり運び出してく

れたろうか。田中は弱い夕方の光がうすぎたなく差し込んでいる空虚な部屋を想像した。それは向坂が帰国したあとの、がらんとした部屋を彼に思い出させた。

(遠藤周作『留学』)

b) 自分 [=工藤] は代金を払わずにこの煙草を受けとった。ああ言う場合、相手の気持ちを傷つけないで金を渡すにはどうした表現を使っていいのか、彼のまずい仏蘭西語ではうまく言えなかった。(ibid.)

上の例の a) 「あのブル・ミッシュ通り」、「今、あのアムラン町」、b) 「ああ言う場合」で用いられている遠称の指示詞アもまた、登場人物の田中と工藤を直示中心としている。したがって、ア系指示詞もまた、語りのテキストでは直示中心の移動が起きると考えるべきである。

(10) 英語の直接話法から間接話法への書き換えでは、**here** → **there**、**today** → **that day**などと並んで、近称の **this** は遠称の **that** に変わる。

He said, “She is coming *this week*.” 彼女は今週やって来る。

→ He said that she was coming *that week*. 彼女はその週にやって来ると彼は言った。

フランス語でも次のような変化があるとされている。

*ce matin* 今朝 → *ce matin-là* その日の朝

*ce soir* 今晚 → *ce soir-là* その日の晩

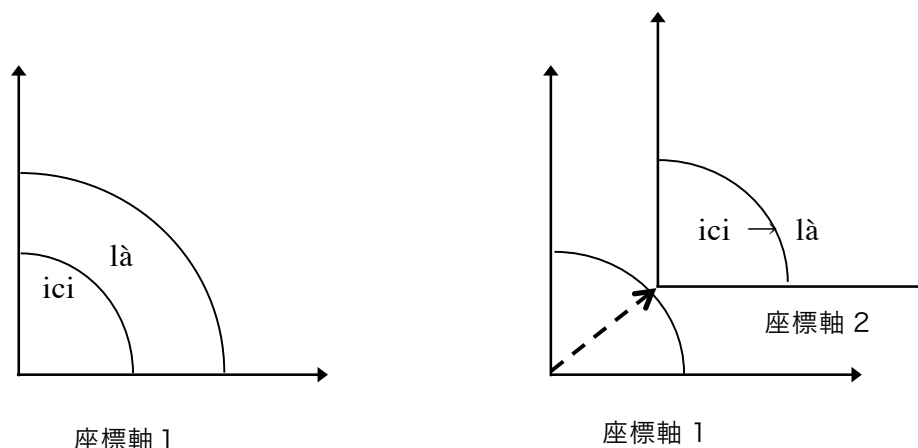
*cette année* 今年 → *cette année-là* その年

朝倉文法事典には次の例文がある。

Qu'on porte *cette lettre-ci*. この手紙を届けてくれ。

→ Il disait qu'on portât *cette lettre-là*. 彼はその手紙を届けるように言った。

この例からわかるように、直接話法から間接話法への書き換えでは、近称の指示詞は遠称に変化するのが原則である。これを直示中心の移動の概念を用いて説明すると次のようになる。



座標軸 1 はふつうの会話での直示中心を原点とする場合を表す。原点から近い場所は *ici*、遠い場所は *là* で指す。右の図の座標軸 2 は、小説などの語りのテキストで登場人物を直示中心とする場合を表す。図の *ici* は登場人物を原点として近くの場所を指す。これは直接話法のケースである。

a. Pierre a dit : « Il fait froid *ici*. » 「ここは寒い」とピエールは言った。

しかし元の直示中心から見ればそこは原点から遠い場所である。したがって、間接話

法では遠称の *là* を用いることになる。間接話法では指示詞や動詞の時制などは主節の支配を受けるため、独自の座標軸 2 を失い、座標軸 1 に合うように再編される。

Pierre a dit qu'il faisait froid *là*. ここは寒いとピエールは言った。

(11) しかしながら自由間接話法ではその変化は起きない。

a) Cette idée de la supériorité de Bovary sur elle l'exaspérait. Puis, qu'elle avouât ou n'avouât pas, tout à l'heure, tantôt, demain, il n'en saurait pas moins la catastrophe ; donc, il fallait attendre **cette** horrible scène et subir le poids de sa magnanimité.

(Flaubert, *Madame Bovary*)

ボヴァリーが偉そうに自分の上に立つかと思うと、どうにも我慢がならなかった。それに、こちらから白状するまでもなく、どうせこの破局はやがて、まもなく、おそくも明日には夫に知れてしまうのだ。してみれば、どのみち**その**うんざりする場面は避けられず、そのときにはいやでも夫の寛大さの重圧に耐えねばならないのだ。

語りのテキストで登場人物の視点を表す指示詞の用法は、このような自由間接話法に現れる指示詞と地続きであり、それを地の文の語りにまで拡張したものと考えることができる。

b) Elle revoit cette maison à travers les tilleuls épais. C'est ce qu'il y avait de plus stable qui arrivait à la surface : **ce** perron de pierre large qui se continuait dans la terre.

(Saint-Exupéry, *Courrier sud*)

彼女は密生した菩提樹の向こう側にあるその家を思い浮かべた。それは記憶の表層に浮かんで来たものの中でいちばんはっきりしたものだった。幅広い石でできていて地面の中へと続いている**あの**入口の階段。

(12) これとは少し異なるのは物語の冒頭に現れる次のような指示詞である。

a) Il leur avait semblé à tous les trois que c'était une bonne idée d'acheter **ce** cheval.

**その**馬を買うのは良い考えだと三人全員に思われた。

b) Si vous étiez comme vous le dites curieux de **cet** homme, si vous portiez votre attention jusqu'au plus secret de son rêve, là où prennent source les histoires et se dénouent les énigmes, vous ne découvririez peut-être qu'un petit garçon.

(F. Nourissier, *Une histoire française*)

もしあなたが言うように**この**男に興味があれば、もしあなたが**この**男の夢の隠された奥底、物語が始まり謎が解けるその場所にまで注意を向けていたならば、あなたが発見するのはおそらく一人の少年でしかないでしょう。

c) このような指示詞の用法を指摘した Philippe は次のように述べている。

Le démonstratif d'ouverture est en effet un marquage d' « emphatie » parmi d'autres, qui signale que l'énoncé relève d'un centre déictique (un point de vue) dont dépendent toutes les marques subjectives, même en contexte d'énoncé à la troisième personne et au passé. (Philippe, G. « Les démonstratifs et le statut énonciatif des textes de fiction : l'exemple des ouvertures de roman », *Langue française* 120, 1998)

小説の冒頭に現れる指示詞は、「感情移入」を表す記号のひとつである。指示詞はそれを含む発話がある直示中心（視点）から発せられたものであることを表している。3人称・過去形で書かれた小説のようなテキストにおいても、人物の主観を表すような表現

はすべてこの直示中心を原点として組織されるのである。

d) 同じ指示詞の用法について Gary-Prieur は次のように述べている。

C'est pourquoi je dirais volontiers que ce genre de GN démonstratif impose au lecteur une position *in medias fabulas* ; il se trouve devant un objet de discours qu'il doit localiser dans l'univers constitué par le texte.

Je préciserai donc maintenant le rapprochement qui était suggéré dans Gary-Prieur & Noailly (1996, 120) entre démonstratifs et débuts *in medias res*. (...) Je reste d'accord avec l'idée qu'il y a, dans les deux cas, implication du lecteur. Mais dans les débuts *in medias res*, les lecteurs sont mis en position de ON, indistincts, ils partagent par définition des connaissances communes. Tandis qu'avec le démonstratif, chaque lecteur est interpellé en tant que personne constitutive d'un couple *je/tu* singulier. (...) cette propriété qu'ont certains GN démonstratifs d'inclure dans la référence un point de vue personnel ne se limite pas aux incipit dans les romans.

(Gary-Prieur, M.-N., « La référence démonstrative comme élément d'un style », J.-M. Gouvard (ed) *De la langue au style*, Presses Universitaires de Lyon, 2005)

このような理由から、[小説などの冒頭に現れる] この種の指示詞は、*in medias fabulas* 「物語の途中から始まる」ように感じることを読者に強いると私は言いたい。読者は [ce N で表される] 指示対象をテキストが作り出す世界の中に位置づけなくてはならない。

私は Gary-Prieur & Noailly (1996, 120)で、指示詞と *in medias res* 「事の途中で」始まる物語の冒頭がよく似ていると指摘したが、これについてももう少し詳しく述べなくてはならない。(…) どちらの場合も読者を物語に引き込む効果があることは確かだ。しかし、*in medias res* 「事の途中で」始まる物語の冒頭では、読者は不特定の ON の立場に置かれる。その定義からして読者はみんなが共有している知識を持っている。ところが [物語の冒頭に現れる] 指示詞の場合、読者は一人一人が特定の「私・あなた」というペアの片割れとして呼び出される。(…) このように、指示の中に個人的な視点を持ち込むというある種の指示形容詞句が持つ特性は、小説の冒頭に限られるものではない。

#### 【解説】

上の引用で *in medias res* 「事の途中で」と呼ばれているのは、物語を初めから語るのではなく、いきなり途中から始める文学技法のことである。例えば「メロスは激怒した。」から始まる太宰治の『走れメロス』がそれに当たる。この技法は、物語の途中から語り始めることで、臨場感を与えて読者を引き込む効果がある。Gary-Prieurはこの技法では、読者は不特定の ON の立場に置かれるとしている。ON とは不特定多数を表す3人称である。したがって「みんな同じ」知識を持っていると想定される。

一方、Gary-Prieur が *in medias fabulas* 「物語の途中で」と呼んでいる技法はこれとはやや異なるとしている。

i) J'étais assis dans **ce** jardin ; je ne voyais pas le soleil ; mais l'air brillant de lumière diffuse comme si l'azur du ciel devenait liquide et pleuvait...

(A. Gide, *La nourriture terrestre*)

私は**その**庭に座っていた。太陽は見えなかった。でもまるで空の蒼穹が液体となって降り注いでいるかのように、光に満ちた大気があたりに広がっていた。

物語の冒頭で先行詞なしに **ce** jardin と指示詞が使われると、まるで語り手の je が指差しながら「その庭」と読み手に示しているかのような印象が生まれる。すと語り手

の je と読み手を含んだ発話の場が擬似的に形成され、読み手は語り手と je-tu の対話的關係に置かれると Gary-Prieur は考えている。読み手は語り手 je の視点に置かれて、je の主観性を共有するように語りが進行する。

### 【参考文献】

指示詞を扱った論文はそのテーマに関して大きく 2 つの時期に分かれる。第一期は主にコピュラ文の主語の il est / c'est の使い分けと、照応表現としての le N / ce N のちがいを取り上げた論文が多い。第二期は Himmelmann (1996) が明らかにした指示形容詞句の用法の分類と、Gary-Prieur & Noailly(1996) が取り上げた文学テキストでの指示詞の破格の用法が話題となった。この議論は今も続いている。

#### 【 1 】 コピュラ文の主語 il est / c'est の使い分けを扱った文献

- [1] Burston, J. M. & M. M. Burston (1981) “The use of demonstrative and personal pronouns as anaphoric subjects of the verb *être*”, *Linguisticae Investigationes* 5.
- [2] Coppieters, R. (1975), “The opposition between Il and CE and the place of the adjectives in French”, *Harvard Studies in Syntax and Semantics* 1.  
※ il と ce の使い分けだけでなく、形容詞の位置の問題も論じていて興味深い。
- [3] Declerck, R. (1983), “ ‘It is Mr. Y’ or ‘He is Mr. Y’ ? ”, *Lingua* 59.  
※この問題についての必読文献の筆頭。下の本はその拡大版。
- [4] — (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-clefts*, Leuven University Press.
- [5] Kupferman, L. (1979) « Les constructions *Il est médecin / C’est un médecin* : essai de solution », *Cahier de linguistique* 9.
- [6] Pollock, J.-Y. (1983) « Sur quelques propriétés des phrases copulatives en français », *Langue française* 58.
- [7] Ruwet, N. (1982) « Les phrases copulatives », *Grammaire des insultes et autres études*, Seuil.
- [8] Tamba-Mecz, I. (1983) « Pourquoi dit-on : “Ton neveu, il est orgueilleux” et “Ton neveu, c’est un orgueilleux” ? », *L’Information grammaticale* XIX.
- [9] 東郷雄二 (1988) 「Mon frère, il est linguiste et le coupable, c’est lui. — 代名詞 IL と CE の用法について」『フランス語フランス文学研究』53、日本フランス語フランス文学会。
- [10] 三藤 博 (1989) 「フランス語における c’est / il est、ce N / le N の対立について」『フランス語学研究』23.
- [11] 坂原 茂 (1990) 「同定文・記述文とフランス語のコピュラ文」『フランス語学研究』24.
- [12] 井元秀剛 (1991) 「人称代名詞 IL の指示対象 — 主に CE との対比において」『仏語仏文学研究』7、東京大学仏語仏文学研究会。
- [13] 藤田康子 (1992) 「« Pour Olivier, elle est un écrivain » — IL est un N 文が成立する要因について」『年報・フランス研究』26、関西学院大学文学部。

- [14] 東郷雄二 (1993) 「指示と照応 — 照応的代名詞 IL と CE の用法を中心に」大橋保夫他『フランス語とはどういう言語か』駿河台出版社。
- [15] 小田 涼 (1999) 「代名詞 CE と IL の指示対象のとらえ方について」『フランス語学研究』33.
- [16] 井元秀剛 (2008) 「もう間違わない il est と c'est」『フランス語学研究』42.

【2】前方照応の le N と ce N に関する文献

- [17] Ariel, M. (1988) “Referring and accessibility”, *Journal of Linguistics* 24.  
※指示対象のアクセス容易度による説明の代表的文献。
- [18] Corblin, F. (1983) « Défini et démonstratif dans la reprise immédiate », *Le français moderne* 51.  
※直後の受け直しでの le N と ce N の問題を最初に提起した論文。
- [19] ——— (1987), *Indéfini, défini, démonstratif*, Droz.
- [20] De Mulder, W. (1990), « Anaphore définie versus anaphore démonstrative : un problème sémantique », G. Kleiber et al. (eds) *L’anaphore et ses domaines*, Klincksieck.  
※Aiel のアクセス容易度による説明を支持し、Kleiber 説を批判した文献。Kleiber (1990) はそれへの反論。
- [21] ——— (1997), « Les démonstratifs : des indices de changement de contexte », N. Flaux et als. (eds) *Entre général et particulier : les déterminants*, Artois Presses Université.  
※ De Mulder は一貫して ce N がそれまでのテキストの流れを断ち切る効果があるとしている。テキスト言語学の見方として興味深い。
- [22] Kleiber, G. (1983) « Les démonstratifs (de)montrent-ils ? ou Sur le sens référentiel des adjectifs et pronoms démonstratifs », *Le français moderne* 51.
- [23] ——— (1984) « Sur la sémantique des descriptions démonstratives », *Linguisticae Investigationes* 8.
- [24] ——— (1986) « Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate », *Langue française* 72.  
※直後の受け直しのパラドックスに「値踏みの場合」(circonstance d'évaluation)と「発話文脈」(contexte d'énonciation)による説明を試みた代表的論文。
- [25] ——— (1986) « Adjectif démonstratif et article défini en anaphore fidèle », David, J. & G. Kleiber (eds) *Déterminants : syntaxe et sémantique*, Klincksieck.
- [26] ——— (1987) « L'énigme du Vintimille ou les déterminants “à quai” », *Langue française* 75.
- [27] ——— (1990) « Article défini et démonstratif. Approches sémantique versus approche cognitive. Une réponse à Walter De Mulder », Kleiber, G. et als. (eds) *L’anaphore et ses domaines*, Klincksieck.  
※ De Mulder (1990) の批判への反論。併せて読むと相違点がよくわかる。
- [28] 春木仁孝 (1985) 「le N と ce N による前方照応について」『フランス語学研究』19.  
※日本のフランス語学でこの問題に初めて触れた論考。
- [29] ——— (1986) 「指示形容詞を用いた前方照応について」『フランス語学研究』20.



- [30] 井元秀剛 (1989) 「le N と ce N による忠実照応」『フランス語学研究』23.  
 [31] 小田 涼 (2008) 「定名詞句 le N と指示形容詞句 ce N による照応のメカニズム」  
 『フランス語学研究』42.

【3】周知の ce N に関する文献

- [32] Gary-Prieur, M.-N. (1998) « La dimension cataphorique du démonstratif. Etude de construction à relative », *Langue française* 120.  
 [33] Haruki, Y. (1993) « Sur le démonstratif à renvoi notionnel », 『言語文化研究』19、大阪大学言語文化部。  
 [34] Kleiber, G. (2004) « Sémantique, référence et discours : le cas des démonstratifs cataphoriques spécifiques », Auchlin, A. et al. (eds) *Structure et discours. Mélanges offerts à Eddy Roulet*, Editions Nota bene.  
 [35] — (2004) « Anticipation, mémoire et démonstratifs cataphoriques », Sock, R. et al. (eds) *L'anticipation à l'horizon du Présent*, Pierre Mardaga Editeur.  
 [36] — (2005) « Des démonstratifs bien énigmatiques : les démonstratifs cataphoriques génériques », Dobrovie-Sorin, C. (ed) *Noms nus et généricité*, Presses Universitaires de Vincennes.  
 [37] — (2006) « Référence et prédication : le cas des démonstratifs cataphoriques », Engwall, G. (ed) *Construction, acquisition et communication. Etudes linguistiques de discours contemporain*, Romanica Stockholmiensia 23, Actas Universitatis Stockholmiensis.  
 [38] — (2011) « Enonciation et texte : grammaire des démonstratifs “titres” », *Cahiers de praxématique* 55.  
 [39] Palm, L. (2001) « Tu te souviens de ce professeur qui ne donnait que des bonnes notes ? Sur les emplois de Ce+N+subordonnée relative », Kronning, H. et als. (eds) *Langage et référence. Mélanges offerts à Kerstin Jonasson à l'occasions de ses soixante ans*, Acta Universitatis Upsaliensis.  
 [40] 春木仁孝 (1990) 「現代フランス語の『周知の指示形容詞』について」『言語文化研究』16、大阪大学言語文化部。  
 [41] — (1991) 「指示対象の性格からみた日本語の指示詞 — アノを中心に」『言語文化研究』17、大阪大学言語文化部。  
 [42] 井元秀剛 (2000) 「指示性と周知性の関連について — 「あの N」と ce N をめぐる対照言語学的考察」『フランス語学研究』34。  
 [43] 小田 涼 (2003) 「周知の指示形容詞をめぐって」『フランス語学研究』37。

【4】語りで用いられる奇妙な (insolite) もしくは不躰な (insolent) 指示形容詞

- [44] Bénard, J. (1998) « Démonstratifs insolents : de quelques emplois du démonstratif dans le texte célinien », *Langue française* 120.  
 [45] De Mulder, W. (1998) « Du sens des démonstratifs à la construction d'univers », *Langue française* 120.

- [46] Gary-Prieur, M.-N. & M. Noailly (1996) « Démonstratifs insolites », *Poétique* 105.  
 ※現場指示でも前方照応でもない指示形容詞の奇妙な用法に初めて触れた論文。
- [47] — (1998) « Le démonstratif dans les textes et dans la langue », *Langue française* 120.
- [48] — (2005) « La référence démonstrative comme élément d'un style », J.-M. Gouvard (ed) *De la langue au style*, Presses Universitaires de Lyon.
- [49] Jonasson, K. (2000) « Référence et perspective », Englebert, A. et als. (eds) *Actes du XIIe Congrès International de linguistique et de philologie romanes*, vol. VII, Niemeyer.
- [50] — (2001) « Traduction et point de vue narratif », Erikson, O. (ed) *Aspekter av litterär Översättning*, Acta Wexionensia II.
- [51] — (2002) « Référence déictique dans un texte narratif. Comparaison entre le français et le suédois », Kesik, M. (ed) *Références discursives dans les langues romanes et slaves*, Wydawnictwo Uniwersytetu Marii Curie-Skłodowskiej.
- [52] Kleiber, G. (1998) « Les démonstratifs à l'épreuve du texte ou sur *Cette côte de la baie de l'Arguenon* », *Langue française* 120.
- [53] — (2005) « Démonstratifs et pratiques des textes littéraires », J.-M. Gouvard (ed) *De la langue au style*, Presses Universitaires de Lyon.
- [54] — (2007) « Des démonstratifs mémoriels aux démonstratifs de point de vue », Genioni, L. & C. Muller (eds) *Problèmes de sémantique et de syntaxe. Hommage à André Rousseau*, Editions du Conseil Scientifique de l'Université Charles-de-Gaulle, Lille 3.
- [55] Philippe, G. (1998) « Les démonstratifs et le statut énonciatif des textes de fiction : l'exemple des ouvertures de roman », *Langue française* 120.

#### 【 5 】 その他

- [56] Cadiot, P. (1988) « De quoi ça parle ? A propos de référence de *ça* pronom-sujet », *Le français moderne* 56 (3/4).
- [57] Corblin, F. (1987) « *Ceci* et *cela* comme formes à contenu indistinct », *Langue française* 74.
- [58] — (1995) *Les formes de reprise dans le discours. Anaphores et chaînes de référence*, Presses Universitaires de Rennes.
- [59] Himmelmann, N. P. (1996) "Demonstratives in Narrative Discourse : a taxonomy of universal uses", Fox, B. (ed) *Studies in Anaphora* (Typological Studies in Language 33), John Benjamins.  
 ※現在の指示詞研究に大きな影響を与えた重要文献。
- [60] Imoto, H. (1997) « Les pronoms démonstratifs *celui-ci* et *celui-là* » 『フランス語フランス文学研究』 70、日本フランス語フランス文学会。
- [61] Jeanjean, C. (1983) « Qu'est-ce que c'est que *ça* ? Etude syntaxique de *ça* sujet en français : construction "quand P + *ça*", *Recherches sur le français parlé* 4.

- [62] Maillard, M. (1985) « L'impersonnel français de *il* à *ça* », *Autour de l'impersonnel*, Grenoble, Ellug.
- [63] — (1986) *Comment ÇA fonctionne*, Thèse de doctorat d'État
- [64] — (1987) « Un zizi, ça sert à faire pipi debout », G. Kleiber (ed) *Rencontre(s) avec la généricité*, Klincksieck.
- [65] Porquier, R. (1972) « L'emploi de *ça* en français parlé », *Le Français dans le monde* 90.
- [66] 練尾 毅 (1991) 「指示代名詞 *ça* の用法について」『アカデミア 文学・語学編』48、南山大学.
- [67] 春木仁孝 (1991) 「*ça pleut / il pleut* — 現代フランス語の“非人称構文”の *ça* をめぐって」『ロマンス語研究』24、日本ロマンス語学会.
- [68] 東郷雄二 (1991) 「« L'anaphore, cet obscur objet de recherche » フランス語の〈指示形容詞 CE+名詞句〉照応 — 談話における情報と視点」『人文』第37集、京都大学教養部.
- [69] — (1999) 「談話モデルと指示 — 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」『京都大学総合人間学部紀要』6.
- [70] — (2000) 「談話モデルと指示 — 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」『談話における名詞句の指示性確立のメカニズム』文部科学省科学研究費研究成果報告書.
- [71] 稲葉梨恵 (2010) 「動詞の直接目的補語におかれる照応詞 *ça* と *le* の比較的考察」『フランス語学研究』44.
- [72] 春木仁孝 (2012) 「フランス語における事態の認知方略について」『言語文化研究』38、大阪大学言語文化部.  
— (2014) 「ÇA を主語とする発話と認知モード」『フランス語学研究』48.
- [73] 長沼剛史 (2019) 「指示形容詞句の総称解釈をめぐって」『フランス語学研究』53.

【6】雑誌の指示詞特集号

- [74] *Langue française* 120号 (1998)  
特集 Les démonstratifs : théories linguistiques et textes littéraires
- [75] *Langue française* 152号 (2006)  
特集 Le démonstratif en français
- [76] *Langue française* 205号 (2020)  
特集 Ce : syntaxe et sémantique